

対話型
パブリック
コメントの
足跡をたどる

01

東京オリンピック・
パラリンピック2020を
契機とした将来像

夢ビジョン2020

「夢ビジョン2020」に意見を届けるまでの流れ

「夢ビジョン2020」をご存じでしょうか？

文部科学省が、未来の日本社会をより良くしていくために、スポーツ選手や芸術家をはじめ幅広い立場の人々の意見を取り入れて作り上げた、日本の未来ビジョンです。

その中で私たちPESTI※は、市民のみなさんの意見を政府へ届けるために、

「知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策」と題した、3回シリーズのワークショップを開催しました。

そして一連の活動のまとめとして、4月29日にシンポジウム

「大阪発! 2020 オリンピックイヤーへの夢ビジョン～科学技術イノベーション政策にモノ申してみた～」を開催しました。

このシンポジウムでは、意見を出してくださった方々へワークショップの成果をご報告するとともに、ワークショップにかかわった市民、PESTI、政策立案者の3者の対談を通して「意見を政策へ届けること」の大切さや難しさについて考えました。

本冊子では、このシンポジウムの内容を中心に、一連の活動についてご報告いたします。



STIに向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計
Framework for Broad Public Engagement
in Science, Technology and Innovation Policy

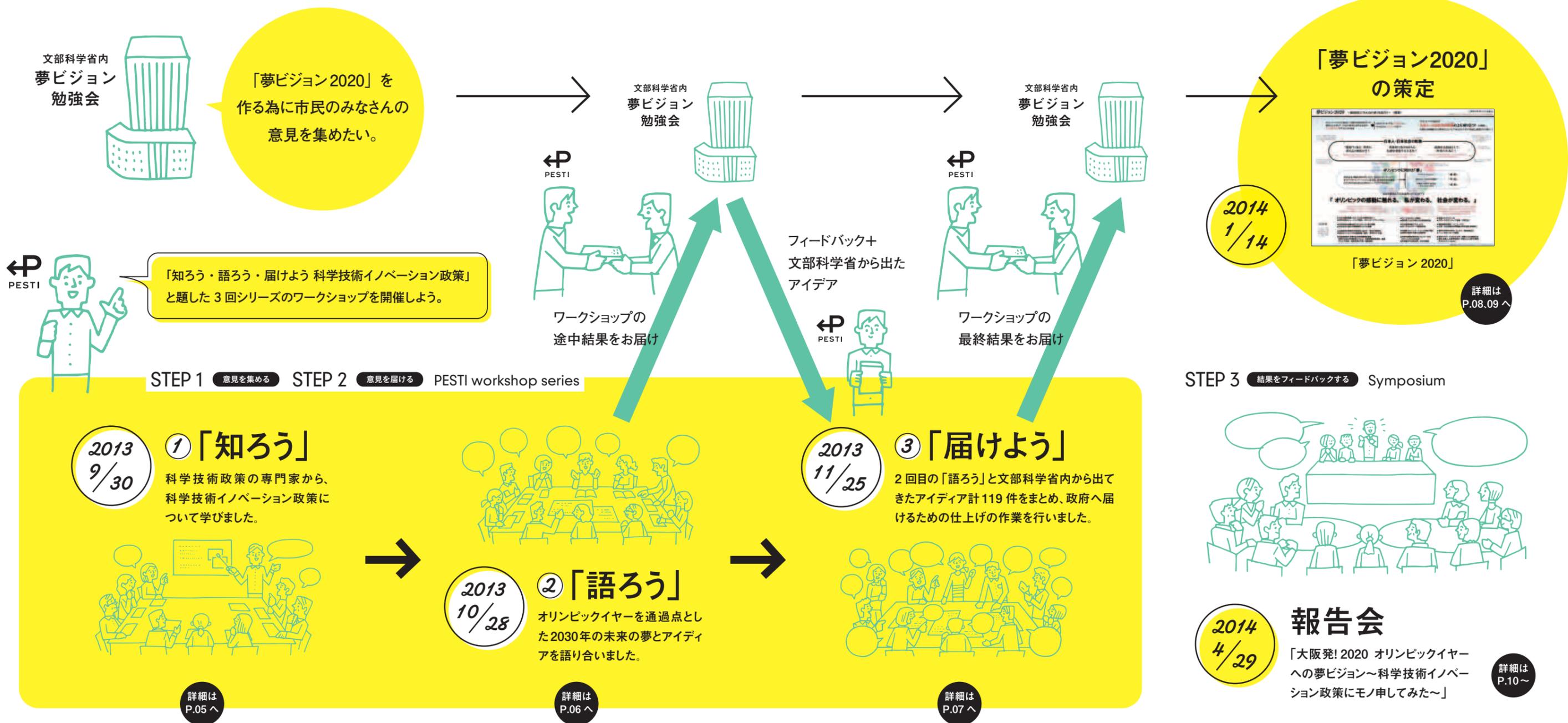
※ ベスティ
PESTI とは

PESTI (=ベスティ) は、国民のニーズや意見を政策プロセスに繋げることを目指すプロジェクトです。京都大学、大阪大学、神戸大学、滋賀大学、鳥取大学、帝塚山大学の6大学に所属する研究者らが2012年に始めた研究開発プロジェクトで、政府が推進する「政策のための科学」事業の1つです。

詳細は
p.03 へ

PESTI のイベントに参加するには？

HP でイベントをお知らせしています。
PESTI で検索。



報告会 (シンポジウム) で何を話したの?

4月29日に開催された、シンポジウム「大阪発! 2020オリンピックイヤーへの夢ビジョン
～科学技術イノベーション政策にモノ申してみた～」での話し合いの抜粋です。

詳細は
P.10～

登壇者



Kei Kano
加納 圭
(PESTI代表/滋賀大学/
京都大学/JST-RISTEX)

市民が「将来への夢」について
語る場を仕掛けた人



Takuya Saito
斉藤 卓也
(文部科学省)

市民の「将来への夢」を
受け取った人



Hiromi Matsumoto
松本 洋美
(主婦)



Wakana Azuma
東 若菜
(大学院生)

「将来への夢」を
語り合う場に参加した人



Eri Mizumachi
水町 衣里
(PESTIメンバー/
京都大学)



Masayuki Itoh
伊藤 真之
(PESTIメンバー/
神戸大学)

司会・進行

① 意見が「届く」って どういうことだとも思いますか?



- そもそも届くプロセスがいまいち見えないので知りたい。届けられたプロセスを聞くと、ああ届いたんだなと実感しました。(→P.20、22)
- 文科省から「実現されましたよ」とお知らせがほしい。政策として動き出した時が、届いた時だ。(→P.19)

(会場) 届いたのかという疑問を直接、政策立案者(斉藤さん)にぶつけられたことはすごい。全国でやってほしい。(→P.23)

② 市民の意見を聞く窓口って、 いつも開いている?



- 基本的には常に。幅広い意見を聞こうという全体の流れがある。実際にどれくらい受け入れられるかは状況や中身による。1人1人がばらばらに来ると難しい。(→P.23)
- ある意味ではつなぐ役割が大事かもしれない。窓は開いていても、一市民としてアプローチは難しい。(→P.24)
- たくさんの意見が集約され、短い言葉でまとめられると、具体的なアイデアが埋没してしまう懸念がある。(→P.25)
- 1つ1つの意見が見えるよう、文言との結びつきをどうトレースするかが課題。(→P.25)

③ 意見を出した人へのフィードバックが必要(会場)

- (会場) コメントを出した人に満足してもらわないと次につながらない。どうやって意見を吸い上げつつ、満足してもらうか。全国展開した際にどうやっていくべきか。(→P.26)
- シールが頂ければうれしい。宣伝に使ったり、人にあげたりできる。(→P.28)
 - ワイドショーなどで、アスリートなどの有名人が出て話すのは?(→P.28)
 - 政策の骨格を作るときには、今回のように上流の段階で互いに色々やり取りしながら作っていくのが良いと思う。(→P.30)

④ タウンミーティングなどとの違いは?

- 一番の違いは、(PESTIの方が市民の方々の意見をまとめる際に)「もう少し、こういう観点で議論していただくといいのですが」とか「もう少しこういう方向でまとめてもらおうと、次の資料に使いやすいのですが」というキャッチボールができたところ。市民の方にボランティアに集まってやってもらったことは新鮮だった。(→P.27)

⑤ 厳しいコメントへの対応は?(会場)

- 理想は、プラス意見もマイナス意見も常に受け取り議論すること。多様な意見を集約し届ける仕組みづくりが必要。(→P.30)
- 市民からは「あかんあかん」のマイナス意見が出がち。でも今回のビジョンにはポジティブに変換されて反映してもらえたように感じる。(→P.31)
- ネガティブな意見をひっくり返してもんでいくと、ポジティブになる。そうやって届けると、ネガティブ意見もうまく反映されていくのではないかと考えている。(→P.32)

⑥ 自分の意見が届くと感じる事が大切

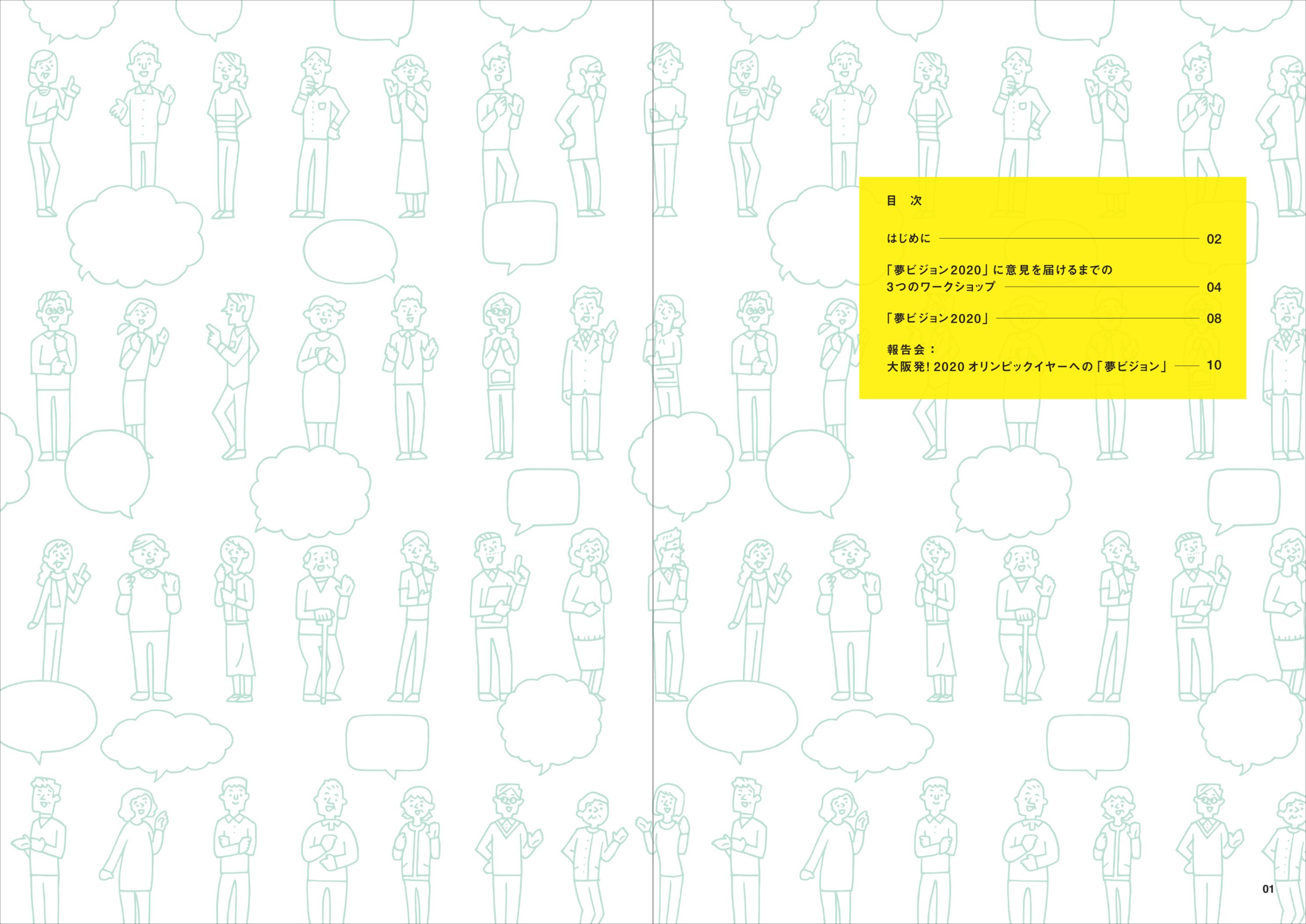
- 今回自分の意見がきちんと届くのだと知って印象が変わった。届くのだということを知らないと動こうとは思わない。(→P.33)
- (会場) パブコメはハードルが高く、昔もう二度と出すまいと思ったが、そう思ったのは届いた感がなかったからだと気付いた。届いたと感じられることは大事。(→P.43)

⑦ 今後の課題は?

- ビジョンに市民の意見の言葉が入ったが、ここから先だと思う。どういう方向なり予算なりで動いていくのかはこれからなので、動きを止めないようにみんなで盛り上げていきたい。(→P.35)
- 届くのだということが分からないと一歩踏み出せない人もたくさんいるはず。ぐるぐる廻るように、活動を継続することが求められる。計画を作り始める段階で関わってゆくことが重要。(→P.34)

⑧ 意見の「熱さ」も政府まで届けたい(会場)

- (会場) 文書になると意見の熱さや強い思いが消えた状態で届けられてしまう感じがする。(→P.37)
- 意見をそのまま箇条書きし、言葉使いを残す方が伝わるのでは。(→P.38)
 - 仲介人がいた方が、自分の思いが具現化されて熱さがきちんと伝わる気がする。(→P.39)
 - 互いの理解を深めることで、より良いコミュニケーションができるかもしれない。(→P.39)
- (会場) 熱い思いというのも非常に重要だが、意見の本質をいかに伝えるかが重要では。(→P.41)



目次

はじめに _____ 02

「夢ビジョン2020」に意見を届けるまでの
3つのワークショップ _____ 04

「夢ビジョン2020」 _____ 08

報告会：
大阪発! 2020 オリンピックイヤーへの「夢ビジョン」 _____ 10

はじめに

対話型パブリックコメントとは？

パブリックコメントを出したことがありますか？

パブリックコメントとは、国や自治体が政策をつくる際に市民のみなさんから広く意見や情報を募集するものです。意見は、インターネット上の投稿フォームや郵送によって誰でも提出することができます。誰にでも窓口が開かれているとはいえ、1人でその政策について調べたり、意見を投稿したりするのはちょっと大変という方もいらっしゃるかもしれません。そんなときは、みんなで集まって考えてみませんか？みんなでわいわい話したら、思いもよらないアイデアにたどり着くかもしれません。

私たちは「対話型パブリックコメント」という仕組みで、みなさんの声を政策へ届けるお手伝いをしています。

対話型パブリックコメントは、従来のパブリックコメントを発展させた新しいパブリックコメントの仕組みです。具体的には、市民のみなさんの意見を集め、それを政策立案者へ届け、その結果をみなさんにお返しする、という3つのステップがあります。各ステップを詳しく説明します。

対話型パブリックコメント3つのステップ

STEP 1 市民のみなさんの意見を集める



様々な場へ出向き、アンケート調査を行ったり、ワークショップを開催したりすることを通じて、多様な市民のみなさんの声を積極的に集めます。意見は3つの方式(対話式・訪問アンケート式・インターネット回答式)で伺います。

STEP 2 得られた意見をPESTIが仲介し、政策立案者へ届ける



みなさんから預かったご意見は、PESTIが集約し責任をもって政策立案者に届けます。また、意見収集を行った各イベント・参加者の特性や、意見の集約プロセスも意見と一緒に届けます。

STEP 3 届けた後の結果をみなさんにフィードバックする

意見を集めて届けたプロセスや、その結果を報告するシンポジウムを開催したり、自分の意見が追跡できるwebシステムの構築などを行います。意見がどのように政策に反映されたのかを公開することで、意見を提出した人はもちろん社会にもその成果をフィードバックします。

これら一連の流れを「対話型パブリックコメント」としています。

夢ビジョン2020とは？

「夢ビジョン2020」とは、東京オリンピック・パラリンピックを契機とした日本の理想の未来像を、政策のためのビジョンとしてまとめたものです。文部科学省から2014年1月に公表され、これから2020年へ向けて、このビジョンをもとに様々な政策がつけられることが期待されています。 →P. 08

「夢ビジョン2020」策定にかかわる対話型パブリックコメント

「夢ビジョン2020」策定にかかわる、対話型パブリックコメント3つのステップ

STEP 1 意見を集める →P. 04~07



「知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策」と題した3回のワークショップを開催しました。ワークショップでは、将来の日本社会のあり方や、それを実現するための科学技術イノベーション政策について市民のみなさんで語り合っていました。

STEP 2 意見を届ける →P. 07~09



集まった市民の方々の意見をPESTIが文部科学省夢ビジョン研究会へお届けし、その結果、「夢ビジョン2020」が文部科学省から策定され、下村博文文部科学大臣の記者会見^{※1}でも、市民が集まってワークショップを開いたということに言及していただきました。

STEP 3 結果をフィードバックする →P. 10~

公開シンポジウム「大阪発！2020オリンピックイヤーへの夢ビジョン～科学技術イノベーション政策にモノ申してみた～」を開催しました。ここでは、意見を出してくださった方々へ届けた結果をご報告するとともに、政府・PESTI・市民の3者の対談を通して「意見を政策へ届けること」の大切さや難しさについて考えました。

この冊子は、これら一連の活動とシンポジウムの内容をまとめた、PESTIの対話型パブリックコメントの記録です。

※1 下村博文文部科学大臣 定例記者会見 平成26年1月14日(火)

STEP 1 意見を集める

STEP 2 意見を届ける

PESTI Workshop Series ワークショップ

「夢ビジョン2020」に 意見を届けるまでの 3つのワークショップ



① 知ろう

2013.9.30

@カフェラボ
グランフロント大阪
ナレッジキャピタル内

まずは政策について知る

3回シリーズのワークショップとして企画された「知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策」の1回目は、科学技術イノベーション政策を「知ろう」という回でした。科学技術政策の専門家である吉澤剛准教授(大阪大学)から、政府が進めようとしている科学技術イノベーション政策の方向性について話を聞きました。

吉澤さんからの話題提供は30分程度。まず、内閣府が推進する科学技術イノベーション総合戦略の全体像についての説明がありました。その後、この総合戦略が日本の科学技術政策の歴史的・政治

的な文脈のなかにどのように位置づけられるのかについて紹介されました。最後に、総合戦略の中でのより細かい政策や事業についての解説もありました。※1

一旦休憩を挟んだ後は、ドリンクやおつまみを楽しみながら、質疑応答の時間が始まりました。科学技術イノベーション政策の中で描かれる日本の社会像について、政策の有効性について、さらには、政策を策定したり実施したりする日本の行政組織のあり方などについて、参加者から数多くの鋭い質問が寄せられました。

(参加者: 33名 大阪・兵庫・京都・東京・福島から参加)

※1 吉澤さんによる話題提供「科学技術立国と呼ばれて～政府の成長戦略を探ってみよう～」の録画映像と資料は、PESTIのHPに掲載されています。



② 語ろう

2013.10.28

@カフェラボ
グランフロント大阪
ナレッジキャピタル内

意見やアイデアを沢山出す

2回目は、科学技術イノベーション政策につながる意見やアイデアを「語ろう」というワークショップでした。オリンピックイヤー 2020年を通り過ぎた2030年の未来を想像し、沢山のアイデアを出し合いました。

今回は、6つのグループに分かれて進めました。ワークショップの始めには、1回目「知ろう」の振り返りもかねて、科学技術イノベーション総合戦略の概要を確認しました。総合戦略について語り合ううちに、「今、日本が抱えている課題」や「日

本のいいところ」なども話題にのぼりました。

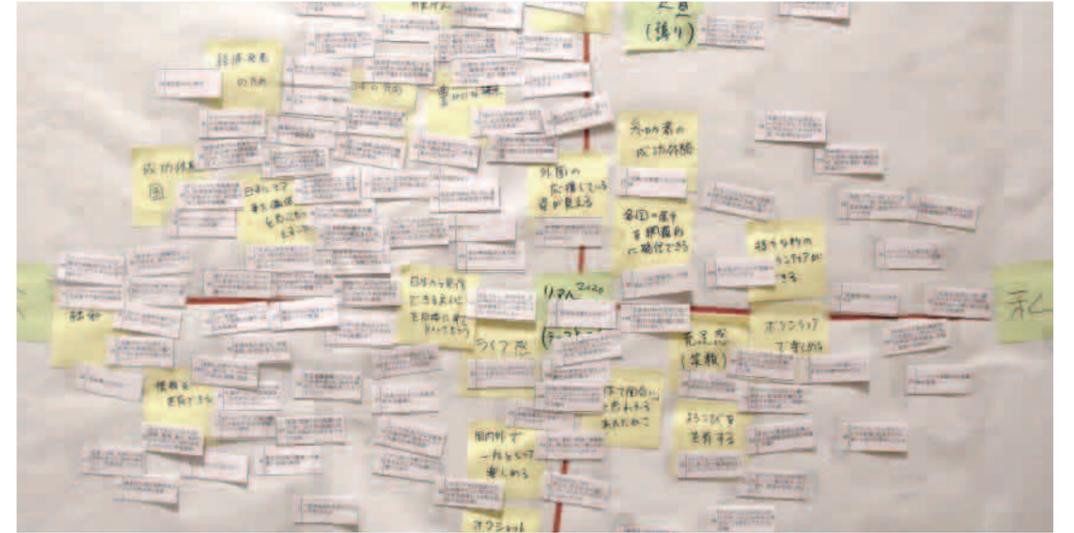
この後、参加者のみなさんには、「日本でオリンピックが開催される2020年頃には、どのようなコト/モノが実現されていると嬉しいですか?」というテーマで語り合ってもらいました。参加者それぞれの経験や価値観を共有しながら、そして、ワークショップ前半で話題に出していた「今、日本が抱えている課題」や「日本のいいところ」を考える材料として使いながら、たくさんのアイデアを出しました。※1

(参加者：25名 大阪・兵庫・京都から参加)



グループごとに語り合った内容をまとめたワークシート

※1 グループごとにまとめた夢ビジョン(将来像)やキャッチフレーズは、PESTIのHPに掲載されています。



③ 届けよう

2013.11.25

@カフェラボ
グランフロント大阪
ナレッジキャピタル内

政府に届く形にまとめる

シリーズ最後、3回目のワークショップは、ここまでに出て来たアイデアを政府に「届ける」ための仕上げの作業をしました。

前回同様6つのグループに分かれて進めました。それぞれのグループには、「夢ビジョン(将来像)」と「夢ビジョンを実現するための科学技術イノベーション」が書かれた119枚のカードが配られました。このカードに書かれた文言は、前回のワークショップで出たアイデア、そして、文部科学省の職員から集められたアイデアが元になっています。

まず、これらのカードに書かれたことをみんなで読み、そして、内容の近いカードを集め、複数のカードのかたまりをつくりました。次に、カードのかたまりを俯瞰することができるような「軸」を考えました。軸を設定することで、複数のカードのかたまりが整理でき、コンセプトが浮かび上がってきます。

このワークショップで得られたコンセプトを元に、PESTIが意見を集約し、文部科学省に届けました。

(参加者：16名 大阪・兵庫・京都から参加)



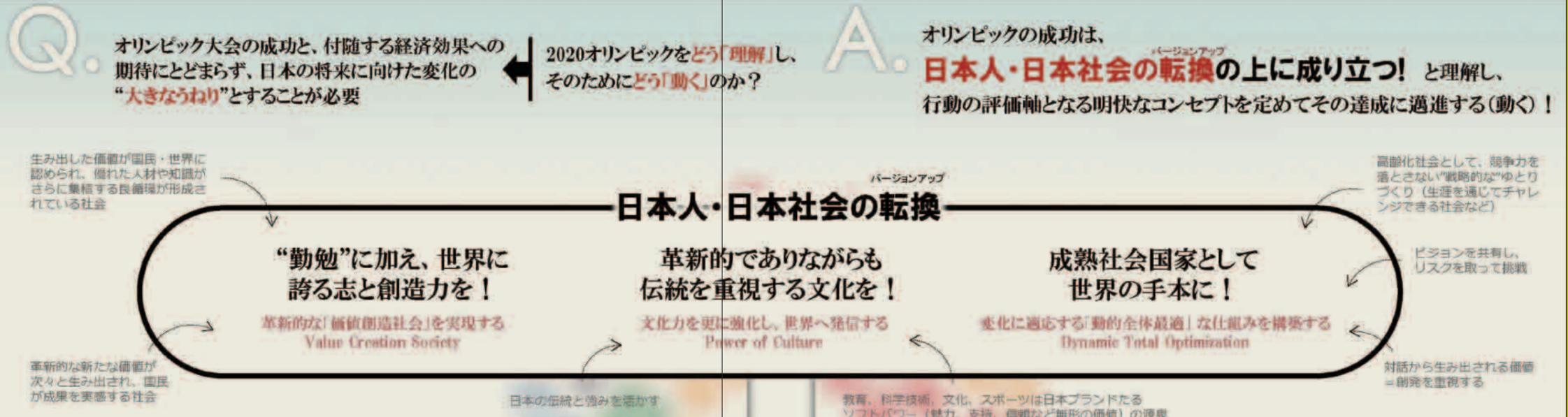
多様な意見を軸にそって整理し、コンセプトを導く

2014.1.14

夢ビジョン2020 ～徹底的に「みんなの夢」を語ろう～ (概要)

文部科学省「夢ビジョン勉強会」

注)資料中、「オリンピック大会」とはオリンピック、パラリンピックの両方を含む



オリンピックに向けた「夢」

省内意見・熟議(約350件)及び、市民とのワークショップ、若手アスリート・アーティスト・研究者、産業界や研究機関などと集中的な意見交換を行い、アイデアを収集!

- ワクワク・カッコいい — 「感動」
- 他者とのつながり・多様性 — 「対話」
- 快適性・利便性・効率性・安全・安心・ゆとり — 「成熟」

上記を踏まえた大会成功へのコンセプト

『オリンピックの感動に触れる。私が変わる。社会が変わる。』

如何に安全・確実な大会運営を実現するか
世界を魅了するダイナミックな祭典を達成
超臨場感での観戦や、ボランティア等様々な大会との関わり

スポーツ、アスリートから感じる、学ぶ
同世代を超えた「対話」と「共有」
文化を築き上げる力の育成

結果として、日本文化の「成熟」と発信、高齢者の活力活用、地域社会の活力・意気さの活用、豊かな環境の保全や社会基盤の整備等、我が国の社会的課題解決に直結する

具体案

コンセプト達成の方策案。今後、様々な対話、熟議を通じて議論し、確実に実践にうつす!

- メダル最多獲得(ロンドンから倍増の80!)
- 世界水準のトレーニング施設。オリンピックツーリズム
- 日本独特の運動会をエキシビジョン等で披露
- 日本文化に触れる情報提供システム整備
- 五輪憲章の精神を学校教育に活かす(教材の開発等)
- 知のオリンピックも全国開催(語学、科学リリック等)
- 社会は変革する夢のある研究開発を促進
快適で安全な交通移動システム、超臨場感観戦技術、義肢・アシスト技術、自然災害の予測・観測技術
- どこでもスポーツ環境
- 夢大使による子供たちの夢実現支援
- 文化鑑賞促進プロジェクト
- ポップカルチャーの拠点形成
- 外国語コミュニケーションの強化支援
- 世界に通用する職人育成事業
- 年齢や障害を問わないユニバーサルデザインのための技術
- 科学館から日本の夢、科学を発信
- 全国バリアフリー化
- スポーツボランティア推進、寄付文化
- 芸術競技を復活・リニューアル
- 上野・文化回廊を世界規模の都市博物館、美術館に
- 留学生交流の日常化(ホームステイ、姉妹校強化)
- 一人一ボランティア推奨
- 安定でスマートなエネルギー確保とその供給社会
- 若手、外国人、女性研究者が“研究したい国”の実現(Research in Japan)

東京のオリンピックではなく、日本、そしてアジアのオリンピックに

「夢ビジョン2020って?」
夢ビジョン2020とは、文部科学省が2020年のさらにその先の社会を見据えて策定したビジョン。五輪開催の年である2020年を、新たな成長に向かうターゲッターとして位置付け、日本社会を元気にするための取組を打ち出したものです。

STEP 3

結果をフィードバックする

Symposium シンポジウム

大阪発! [報告会] 2020オリンピックイヤーへの「夢ビジョン」 ～科学技術イノベーション政策にモノ申してみた～

開催日時 2014年4月29日(火・祝)
13時～15時

開催場所 グランフロント大阪
ナレッジキャピタル

参加者 20代～80代の男女 計51名
内訳：一般参加者33名・登壇者6名・
PESTIメンバー12名



登壇者



Kei Kano
加納 圭
(PESTI代表/滋賀大学/
京都大学/JST・RISTEX)

市民が「将来への夢」について
語る場を仕掛けた人



Hiromi Matsumoto
松本 洋美
(主婦)

「将来への夢」を
語り合う場に参加した人



Eri Mizumachi
水町 衣里
(PESTIメンバー/京都大学)

司会・進行



Takuya Saito
斉藤 卓也
(文部科学省)

市民の「将来への夢」を
受け取った人



Wakana Azuma
東 若菜
(大学院生)

「将来への夢」を
語り合う場に参加した人



Masayuki Itoh
伊藤 真之
(PESTIメンバー/神戸大学)

司会・進行

目次	ごあいさつ	P.12
	趣旨説明	P.12
	登壇者自己紹介	P.16
	ディスカッション1	
	①意見が「届く」ってどういうことだとおもいますか?	P.17
	②市民の意見を聞く窓口っていつも開いている?	P.23
	③意見を出した人のフィードバックが必要	P.26
	④タウンミーティングなどとの違いは?	P.26
	⑤厳しいコメントへの対応は?	P.30

ディスカッション2	
「届いた=夢ビジョン2020文書に反映された」ときに	P.32
どう思いましたか?	
⑥自分の意見が届くと感じる大切	P.33
⑦今後の予定は?	P.34
⑧意見の「熱さ」も政府まで届けたい	P.36
おわりに	P.42

①～⑧の数字は挟み込み裏面の数字と対応しています。

ごあいさつ

水町 こんにちは。そろそろ1時になりましたので、シンポジウムを始めようと思います。私は、京都大学で研究員をしております水町衣里と申します。よろしくお願いいたします。今日、司会進行をする2人のうちの1人です。

「大阪発! 2020オリンピックイヤーへの夢ビジョン～科学技術イノベーション政策にモノ申してみた～」を始めたいと思います。(拍手)

始める前に、いくつか事務連絡をさせていただきます。

ここグランフロント大阪内のナレッジキャピタルというところでシンポジウムをしているのですが、今日は、ユーストリームで同時に配信をしています。後ろの方でビデオ撮影をしている人がいます。皆さん、今座っていただいているテーブルにいらっしゃるということは、ちょっとぐらい映ってもいいよ、という方かなと思います。どうしても映るのが嫌という方は、後ろのテーブルに移動してください。

カメラで、こちらの記録のために写真撮影もします。後ろで手を挙げている人が、うろろうして写真を撮ります。皆さま方がお互いに撮っていただくのは、こちら側は禁止しません。嫌がる人は撮らないで欲しいと思いますが。

後ろにコーヒーもご用意していますので、どうぞ、シンポジウム中でも、ご自由に取りに行って、おかわりなどしていただければと思います。

受付でお配りした事前アンケートを書き終わっている方は、お近くのスタッフまで渡していただけると、ありがたいです。

では、まず、今日の趣旨説明を、PESTIの代表からさせていただこうと思います。よろしくお願いいたします。

趣旨説明

加納 皆さん、初めましての方もおられると思います。加納と申します。PESTIというプロジェクトを立ち上げまして、その代表をしています。本職は大学の教員で、滋賀大学の教育学部と京都大学に所属しています。

今日は、「世界一ためになる、ひまつぶし」というナレッジキャピタルの1周年記念イベントの一環として開催させていただくシンポジウムに、皆さん、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

まずは、「大阪発! 2020オリンピックイヤーへの夢ビジョン」というのは一体何なのかということ。そして、「科学技術イノベーション政策にモノ申す」というのは、物々しい感じもしますが、PESTIではワークショップで出てきた意見を政策に届けるということをしていました。その過程と、どんなものが届いたのかということをお話したいと思います。

当日の様子を生中継していました。その映像は、YouTubeで見ることができます。(「大阪発! 2020オリンピックイヤーへの夢ビジョン」- YouTube)

PESTIについては、HPか本冊子裏付をご覧ください。
HP: <http://www.pesti.jp/>

当日のスライドをPESTI HPにてご覧いただけます。
HP: <http://www.pesti.jp/>

3回シリーズのワークショップ「知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション戦略」を開催しました。(P.04へ)

意見を政策に届けた、と言いましたが、そのお届け先は、文部科学省内に出来上がった「夢ビジョン勉強会」です。この「夢ビジョン」勉強会は、下村文部科学大臣の記者会見の中の発言によると、2020年におけるわが国のあるべき姿と、そのために必要な文部科学政策について文科省の若手職員と一緒に考える、ということで立ち上がったものです。われわれは、そこに皆さんの声を届けられないかと思って、対話の場を仕掛けたグループです。

どんなことをしたかをざっくり言うと、将来ビジョンについて市民が集まって対話して、結果を集約して、お届けするような場をつくってみました。最終的に、それを先ほどの「夢ビジョン勉強会」にお届けしました。お届けした先の方にも今日は来ていただいています。

受け取った側は、それを編集したり、発表・公表したりしていくようなプロセスがありました。皆さんのお手元にA3の大きなカラフルな紙があると思いますが、こういうものが2014年1月に文部科学省から公表されました。『オリンピックの感動に触れる。私が変わる。社会が変わる』というようなキャッチフレーズも作られています。

この公表資料を作るにあたり、さまざまな方から意見を伺った、と書かれています。もう少し詳しい資料が文部科学省のホームページに置かれています。われわれは、市民からのアイデアを集めるということに注力しました。市民ワークショップを昨年9月、10月、11月と3カ月連続で、ナレッジキャピタルで行い、議論しました。今日は、そのワークショップに参加していただいた方々にもご参加いただいていると思います。登壇者の2人は、3回のワークショップ全てに参加していただいた方々です。

市民の意見を集約し、オリンピック・パラリンピックを通過点とした2030年に目指すべき姿や目指すべき姿に向けた、夢や価値観というものをうまくまとめ上げ、これを今日の登壇者の1人である文部科学省の齊藤さんのところへお届けするという仲介人のようなことを、PESTIプロジェクトがやってきました。

下村大臣が1月14日に記者会見で、「職員からの350件に上る提案の他、市民とのワークショップや各界との集中的な意見交換から出てきたアイデアを、1つは、ワクワク・カッコいいといった『感動』、2つ目に、国や世代を超えた『対話』、3つ目に、快適性や安全・安心などを生み出す『成熟』というふうに整理をしながら、コンセプトを導いております」と述べたように、市民が集まってワークショップを開いたということにも言及していただいたような状況です。

われわれは、皆さんで集まって、意見を言って、政策に届けていくという全体の流れ自体を対話型パブリックコメントという新しい仕組みと

PESTIが今回意見をお届けしたところです。

夢ビジョン2020
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/01/1343297.htm
(P.08へ)

して提案しています。「対話型パブコメのススメ」というパンフレットも配布させていただきました。

先ほどお昼ご飯を食べながらミーティングをしていたのですが、「(パンフレットに描かれている)このサルは一体何なんだ」という話がありました。これは、いわゆる「ゆるキャラ」を作りたくて作ってみた「対話モンキーズ」というものでして、「話すモンキー」「聞くモンキー」「見るモンキー」は、「みんなで知ったり、話したり、聞いたりしていくのが重要だね」というメッセージです。対話型パブリックコメントのキャッチフレーズとしては、「知ろう 語ろう 届けよう」というものになっています。

フェイスブックページもありますので、フェイスブックを利用していらっしゃる方は、よかつたらポチッと「いいね!」をしてください。

では、実際にどんなことをしてきたかをご紹介します。

対話型パブリックコメントの企画と実施をしてきました。具体的には、9月と10月と11月に3回シリーズのワークショップをしました。

1回目は「知ろう」というワークショップで、9月30日に、ナレッジキャピタルの1階にあるカフェラボというカフェのスペースを使って行いました。アベノミクス「第三の矢」について勉強しようということで、科学技術政策の専門家を呼んできてお話を聞きました。

2回目は「語ろう」というワークショップで、オリンピックイヤー2020年を通過点とした2030年の未来をみんなで語り合っつけていくというような回でした。例えば「田舎ベーション」というようなキャッチフレーズで図にまとめてみたりという作業を皆さんでやりました。

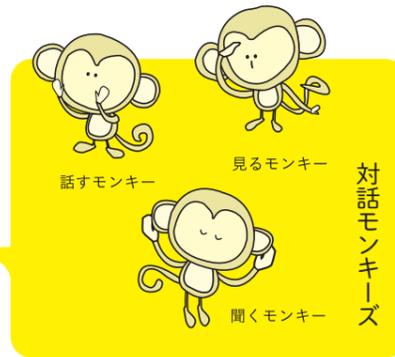
3回目は「届けよう」というワークショップで、いよいよ語り合ってきた内容を届けるのだという回でした。われわれが2回目のワークショップで語り合った結果と、文部科学省内でも同じように語り合った結果を合わせて、どうやって文部科学省に届けたらよいのだろうかというような議論をしました。

これらを踏まえて、最終的に、意見を集約して届ける、ということをしていました。

扱った意見は119件です。途中段階でまとめ始めたので、実際には意見はもっとありました。われわれ市民側から出てきたもの74件と文科省側から出てきた45件をうまく集約すると4つの価値観にまとめることができ、それをさらに集約すると、「対話」「感動」「成熟」という3つのビジョンに集約できることに気がきました。

こういう構造全体を文科省にお届けすることをしてきました。

斉藤さんは、文部科学省の「夢ビジョン勉強会」の中の科学技術チー



「対話型パブリックコメント」で検索!

当日の映像はYouTubeで見ることができます。(「大阪発! 2020オリンピックイヤーへの夢ビジョン」- YouTube)

第三の矢:「民間投資を喚起する成長戦略」



ムに所属されていたので、科学技術との結びつきを少し考えてみようという話になりました。文部科学省の関連組織が「デルファイ調査」を行って出した科学技術予測には、2020年ごろに技術的に実現しそうな技術リストがあります。この技術リストを見ながら、ビジョンや価値観を具体化するために必要な技術は何だろうかということをつづけることをしてみました。

2014年1月5日に読売新聞の一面を飾った記事がこれです。2020年に目指す先端科学技術が発表されました。

ここまでの説明は少し抽象的だったので、具体的にどんな意見が出てきて、それはどのようにまとめられていったのかということの一部をご紹介します。

意見は下に9つ書いてあります。左側は、市民側から出てきた意見だと思ってください。「おじいちゃんおばあちゃんから聞いた『あのときのあれはおいしかった』を実体験として次世代に受け継ぎたい」「オリンピック中の記録を残しておけば、AR技術などを使って、数年後でも、体験の一部は共有できる」「子どもたちに生のオリンピックを見ることができたらいい」というようないろいろな意見が出てきました。同様に、同じカテゴリーに入るような意見としては、文部科学省側からは「スタジアムに入場できなくても多人数で臨場感をもてるパブリックビューイング」「自宅でも臨場感を体験できる遠隔臨場感技術があったらいいね」というものが出てきました。

こういうのをぐるっとまとめられるような価値観としては、「他者とのつながり・多様性」や「ワクワク・カッコいい」となります。

そして、3つに集約したビジョンの中では「対話」と「感動」につながっているのかなとなりました。また、2020年に実現可能だと言われている科学技術群からいくつかをピックアップして紐付けるという作業もしました。

これがワークショップをして政策へ届けるまでに行っていた作業になります。

文部科学省内に「夢ビジョン2020~徹底的に『みんなの夢』を語ろう」というウェブサイトが、つい2日か3日前に立ち上がったので、よろしければご覧ください。そのウェブサイトに関連イベントとして今日のイベントが掲載されています。同じページの少し下の方にいくと、夢ビジョン本体の詳細版のPDFなども置かれていますので、ダウンロードして、ご覧ください。今すぐ気になる人は、スライドにQRコードを仕込んでおいたので、ここにスマホをかざしていただいたら、この場でゲットできます。今すぐ気になるという方は、そうしてご覧いただければと思います。

水町 ありがとうございます。9月から11月にかけて私たちがナレッジキャピタルのカフェラボという場所で行った対話の場から、文部科学

文部科学省の科学技術政策研究所が5年ごとに調査を行い発表。研究者へのアンケートを元に、今後30年間に実現が期待される科学技術の実現時期や重要性について、予測したものです。
データ:
<http://www.nistep.go.jp/research/scisip/delphisearch>

省に意見が届いて夢ビジョンになるまでの過程を説明させていただいたのですが、今日は、その過程に関わった人たちが、この前に並んでいます。そういう場を仕掛けた人、参加して意見を述べた人、お届けされた人が、この真ん中の4人です。私が、司会の1人目で、向こう側にいるのが、もう1人の司会です。

伊藤 神戸大学の伊藤です。紹介されなくて、どうしようと思っていました(笑)。よろしくをお願いします。

水町 今日のこの後の進め方を説明させていただきます。

前のこの4人で、文部科学省に私たちの意見が届くまでのプロセスを振り返りながら、「あのときはこうだったよね」とか、「あれは本当に届いたのですか」という話を繰り返して、徐々に、この会場に来ていただいている皆さん方からも質問やご意見を伺っていただければいいなと思っています。

まずは、そのためにも、この前に並んでいる人たちがどんな人たちかというのを、皆さんも知りたいと思われるだろうと思うので、自己紹介をしていこうと思います。その後、主に、こちら側で設定させていただいた2つのディスカッションテーマがあるので、そのテーマについて順番に皆さんでお話をしていこうと思います。

登壇者自己紹介

まずは、この4人の自己紹介から始めます。座っている順番でいいですか。意見を皆さんから集めてお届けするというのを仕掛けた人ということで、簡単にお名前と、普段何をしているのかということ併せてどうぞ。

加納 加納圭といいます。イニシャルがK.Kで、名前が圭なので、覚えて帰ってください。本業は、滋賀大学の教育学部で、小学校や中学校の先生になりたい子たちを育てるといって、それはそれで結構夢のある仕事をさせていただいています。そういう子たちにも、もっと将来を見据えて黒板に向かえ、ということをやっていますが、「何をやっているんだ」ということを思われそうです。教育現場のことも気になるのですが、もう少し先のことを見据えてやっていかなければいけないのではないかと、いうことを最近思っています。そういう思いもあって、皆さんの声を「夢ビジョン」という形で届けることをやっています。これからもよろしく。

水町 ありがとうございます。次に座っている真ん中のお二人は、私たちが仕掛けた対話の場に参加して下さった方です。9月と10月、11月、



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

3回連続のシリーズとして開催したワークショップの皆勤賞だったお二人です。お名前と、普段どんなことをしているかということをお話しただければと思います。

松本 神戸からまいりました松本と申します。普段は何をしているかというと、専業主婦なので、家で、お料理や家事をしています。時々サイエンスカフェなどに参加させていただいて、「ああ、こんなすごい世界があるんだな」と感動しています。それのおかげで、半年くらい前になるのですけれども、ワークショップに誘っていただきました。3回皆勤というご褒美で、この場に立っているのかなと思っています。

水町 ありがとうございます。

東 東若菜と申します。神戸大学の農学研究科のドクターの2回生です。普段は森林の勉強をしています。大きい木、巨木や大木が大好きで、いろいろ研究をしています。私も同様に3回皆勤賞で今回呼んでもらえました。よろしくをお願いします。

水町 ありがとうございます。そして4人目は、意見を届けられた人ということで。

斉藤 文部科学省の斉藤と申します。よろしくをお願いします。普段は、政策評価を担当しておりまして、文部科学省の全体の政策をどのように評価して良い方向にもっていくかという仕事をしています。

先ほどご紹介いただきましたが、去年の9月から文科省の中にオリンピック夢ビジョンを作ろうという動きが出てきて、そのメンバーとして参加させていただいています。

先ほどの紹介の中に、文科省の若手職員を集めてうんぬんとあったのですが、実際私より少し若いぐらいの、中堅ぐらいのメンバーが集まって作ったビジョンということになっています。その途中で、加納さんをはじめ、いろいろな方にご参加いただいて、普段の政策の作り方でない形でできたのかなと思っています。今日は、よろしくをお願いします。

ディスカッション1

①意見が「届く」ってどういうことだとおもいますか?

水町 では早速、ディスカッション1に入ろうかと思うのですが、その前に1つだけ聞いておきたいことがあります。先ほど加納の説明の中にも出てきたと思うのですが、夢ビジョン2020を作るに当たって、いろいろな業界の方や市民に意見を聞きましたということがスライドの中に出

てきました。そもそも最初からいろいろな人に意見を聞きに行き、「夢ビジョン2020」を作ろうと思われていたのですか。斉藤さんにお伺いしたいと思います。

斉藤 A3の1枚紙が配られているかと思いますが、これは夢ビジョンについての概要版になっています。オリンピックが2020年東京で開かれます。その大会が成功すれば、直接関連する経済効果はもちろんあると思うのですが、それだけではなくて、せっかくの機会なので、日本の将来に向けた大きな変化、大きなうねりをつくっていく方がいいのではないかというような話が大臣からありました。オリンピックの開催が決まった直後に、下村文部科学大臣がオリンピック担当大臣を兼任されることになって、その大臣が、こういうものを作ろうではないか、とおっしゃったのがもとです。夢ビジョンというぐらいなので、文部科学省が関わるころだけのことを書いても仕方ないので、オリンピックに向けて日本がどのように変わっていくことができるかということ、省庁などの縦割りを超えて、みんなで議論しましょうということで始まりました。文科省の職員だけで内輪で議論していても、議論の幅も広がらないだろうし、なるべくいろいろな立場の方にお話を伺って作ろうということで作ってきました。

先ほどスライドでご紹介いただきましたとおり、文科省全体としては、スポーツや文化なども扱っていますので、文化人の方やスポーツ選手にも伺いましたし、もちろん研究開発も扱っていますので学生などに伺いました。あとは、デザイナーの方など、普段あまりお付き合いのないような方といろいろお話をして作ったりしました。その中の1つとして、こちらの加納さんがワークショップを開催されるということで、では一緒にやりましょうとなり、いろいろ協力していただきながら作ったのが経緯です。

伊藤 有名人で言うと、どの辺の人が？

斉藤 為末さんとか。

水町 私たちが最初に議論したいと思ったのは、そもそも「届く」というのは、どういうことだと思いますか、ということです。このナレッジキャピタルのカフェラボでいろいろ話し合っ、意見を出し合っ、それをある程度PESTI側でまとめて、届けたつもりになっているわけですが、「届く」ってどういうことだろうと。意見を出し合っ、ぶつけたところで、もし、ぶつけたままになっていて、その辺に転がっていたら、きつと「届く」と言わないような気がします。今日は「届く」というのは、どういうことだったのだろうというのをもう一回振り返ってみたいと思います。

「夢ビジョン2020」を文部科学省が策定することになったきっかけのお話です。



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

最初に、意見を出した側のお二人に聞きたいと思うのですが、先ほど文科省の資料の中にPESTIからのワークショップのご意見が、という文言があったのですが、届いた感じがしますか。

松本 実際のところ、届いたという感じはしていないのです。いろいろな意見が安倍政権で具体的に動き出した時点で、届いたのかなという感触が得られるのではないかなと思います。

政権で動き出した時が、届いた時だ。

伊藤 松本さんは、ワークショップのときは、どんな意見を出されたのですか。

松本 私は、日本ファンを増やすという意味で、オリンピックを見に来てくださった外国の観光客の皆さまを東京のオリンピック会場だけでなく、地方にも行っていただきたいと思いました。田舎にはいろいろな魅力があって、外国の観光客の人は、それを知らないで帰ってしまわれるのはとても残念だと思います。地方の田舎に行って、珍しい食べ物や風景や人情に触れていただければ、再度オリンピック以外でも日本に来ていただける機会が増えるのではないかと思います。日本ファンを増やしたい。それがひいては田舎の活性化にもなる、というようなことを言った気がします。半年前のことなので、記憶が曖昧ですが。

伊藤 加納さん、斉藤さん、そういう意見が入っていたはずなのですが。

加納 僕は届けました(笑)。

伊藤 受け取った覚えはありますか。(斉藤さん、うなずく) はい、大丈夫ですね。だけど松本さんとしては、いまいち届いた実感が？

松本 今のところ、ないですけれども、それが「こういう形で実現しました」と文科省の方からお電話なり(笑)、「あなたの意見が採用されて、このようになりました」という返事を頂ければ、とてもうれしいし、3回のワークショップに参加してよかったなと感じられると思います。

伊藤 加納さんからの電話では駄目で、文科省からの・・・。

松本 加納さんからの電話ではちょっと信用性がないので(笑)、仲介人ではなく、元のところからご連絡があったら、とてもうれしいかなと思います。

東 私はまず「届く」ってどういうことなのか、私たちが話し合ったこ

とが、どのように届けられたのか、ということにすごく興味があります。

ワークショップに参加していたメンバーで、出した意見がどういう形で上に行くのかなという話をワークショップの中でしていました。例えば先ほどの「田舎ベーション」という形にグループでまとめました。ワークショップ全体としては6個ぐらい作ったのですが、あのままの形で政策の方に見てもらえるものなのか。あれはどこかで文言になってしまって、がっつと集約された形で政策側に行ってしまうのか。どう届けられるのかというプロセス、つまり「届く」とはどういうことなのだろうと思っています。

水町 「実現されましたよ」とお知らせされたら「届く」という感じかなというご意見と、もう1つは、そもそも届くプロセス、どうやって届けられたのかがいまいち見えないというお話があったと思うのですが、どちらからいきますかね。プロセスの方からいきますか。そもそも、どうやってお届けしたのですかね。

加納 「このように届けましたよ」というのをまず言っておくと、先ほど「田舎ベーション」と言っていた、みんなでまとめた絵があります。これは6個のグループでそれぞれ出来上がったので、こういうのが6枚ありました。これをそのまま「こんな6枚が出ましたよ」「こんな方々が参加されましたよ」とまとめてお届けしました。というのが届けた側の主張なので、届いたかどうかは、お聞きしたいところです。

その後、これら6枚の絵がどういう位置関係にあるのかなど、もう少し情報を集約した方が届きやすいのだよ、ということをお教わったのです。お届けし、そのお届け先から、もう少しこうした方が届きやすいよというのを教わって、集約したものをまた届ける、というのを3回ほど繰り返しました。届けた側としては、2回目の結果も3回目の結果も届けたという感じですね。

斉藤 実際届けられました (笑)。先ほどの「田舎ベーション」は記憶にありますし、1枚1枚絵もありましたし、こんな感じでやりましたという解説を書いていただいたりレポートのようなものも拝見して、「面白いですね」という話はしていました。

さらに、付箋がべたべた貼ってある写真、みんなで「これとこれは似ているよね」という議論をしていただいたのだと思いますが、あの写真については「このようにみんなでやったのですよ」と言って、大臣に説明するときに使った記憶があります。

今回、オリンピックを大きなうねりにしたい、ということで、最初は2020年オリンピックがどのように動いていくのかというのを考えていたのですが、2020年にこれをやると言うだけだと、2020年が終わったら、

そもそも届くプロセスがいまいち見えないので知りたい。

PESTI側からみた「届く」

政策立案者(斉藤さん)側から見た「届く」



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

それで燃え尽きてしまう。それは少し違うのではないかという議論がありました。では、将来日本をどのようにしたいのか、われわれの生活はどのようになったらいいのか、ということなど、遠い将来の目標を考えた上で、それを実現するために2020年までにどうしようかというのを議論していました。

遠い将来像をどのように作っていくのかを考える中で、「オリンピックについてこんな将来がいい」とか、「オリンピックでこういうことができたら楽しいね」というのを集約していくと、それが将来の姿や夢につながるのではないかと、ということで、いろいろとやりとりをさせていただきました。頂いたさまざまなご意見は、最後は「対話」「感動」「成熟」という3つの言葉になってしまっているのですが、この3つの言葉を作り出した時には、頂いたご意見をすごく参考にさせていただきました。この3つは、いきなり思い付きで出てくるようなものではありません。山ほどある意見を集約して集約して、何回も何回も議論させていただいて、ここにたどり着いたということになっています。

「夢ビジョン」は、こういうのがいいなというビジョンです。これがすぐに政策になって、すぐ予算が付いて、うんぬんというものではないのです。ですから、先ほどおっしゃっていた文科省から連絡がこないと…、というのは、まだそこまで具体化していないと思っています。

政策を作るのは、すぐ目の前のことを見ていけばいいのですが、ビジョンというのは、全体を見ないと作れません。今回のようなところに呼んでいただいたのが参考になったということだと思います。

伊藤 大臣の反応は、どんな感じでしたか。大臣には使っていただけそうですね。

斉藤 はい、大臣にご説明をしたのですが、かなり喜んでいただいた、というのは言い方が変ですが、評価をしていただきました。大臣に言われたのは、「役所の資料っぽくないね。外に頼んで作ってもらったみたいだね」と。あとは、普段のやり方と違って、いろいろな方を巻き込んで作っていくという調整を文科省としても行ったのですが、これが面白いのではないかと、ということで、文科省の中の幹部職員をみんな集めた訓示のようなところでも資料を全部配っていただいて、「こういう面白いこともあるので、みんな前向きに仕事をしていこう」と。そんなことに使っていただいたりもしています。そういう意味では非常に評価をしていただいていると思います。

伊藤 松本さん、どうですか。

松本 そういう大臣の反応を聞いて、うれしいなと単純に思います。政

権が替わったり、大臣が代わったりしても継続されることが大事なかなと思います。

東 届けられたプロセスを聞くと、「ああ、届いたんだな」というのをすごく実感しました。3回のワークショップの最中も、「届くのかな? どう届くのかな?」という感じだったのです。でも、どこまで届くかは別にして、こういう日本になってほしいな、という話を一般の方々がしているというのは結構楽しかったです。この3回のワークショップは、半年前のことですが、楽しかったのを覚えているぐらいです。

届けられたプロセスを聞くと、ああ届いたんだなと実感。

水町 まとまってしまいました(笑)。多分、この会場の中にも、ワークショップに3回は行かなかったけれど、2回は参加した方とか、1回だけは参加したという方がいらっしゃるかもしれません。今話を聞いて、「ここはどうだったのですか」「いや、私は、それが届いたと思いません」などあれば、お伺いしに行きますが、いかがですか。

伊藤 ワークショップに参加された方々がいらっしゃいましたら。

A いろいろ勉強になりました。実際意見が言えて良かったと思います。ありがとうございます。

伊藤 お隣のBさんは、1回目のワークショップに参加されましたね。

B すみません、今日は、ありがとうございます。入院したりしていたので、きちんと参加したり考えたりできなかったのですが、今聞いておりました、加納先生のところのPESTIが窓口になって文科省につながったという話がありました。PESTIのような、市民と文科省をつなごうという集まりは、全国で何カ所ぐらいあるのでしょうか。加納先生のように、このように発想して、それをつなごう、届けよう、というのは、これは本当に大切なことだと思います。今日、このシンポジウムの前半に「届いたのだろうか」というご質問を直接文科省の方にぶつけていただいたわけですが、これはすごいことだと思うのです。これを全国にぜひ広げていただきたいと思います。

届いたのかという疑問を政策立案者に直接ぶつけられたのはすごい。

伊藤 それは今日のまとめの話ですね(笑)。始まったばかりなので、これから広げようと思っています。

B 本当に前半聞いただけで、わくわくしました。

伊藤 ありがとうございます。Bさんは、大阪でサイエンスカフェをさ



れている方です。Bさんのところで、そういう議論をできそうですか。

B まとめる能力が・・・PESTIを見て、主催者の方のいろいろなまとめる力が必要だと感じました。

伊藤 では、PESTIが応援に行きますので。

水町 シンポジウムが始まって40分が経ったのですが、これではさすがにまとまり過ぎなので、あと1時間20分、もう少し話を聞いていこうかなと思います。

加納 今回のやり方というのは、僕たちだけで考案したわけではありません。基になっているのは、京都市基本計画に対して、京都市に意見を届けようというのをされている市民団体の方々の活動です。パブコメ普及協会というのを作っていらっしゃるのですが、そういう方々と共同で対話型パブリックコメントという仕組みを作ったりしています。関西で今から広げていけたらと思います。

②市民の意見を聞く窓口って、いつも開いている?

水町 今お話を聞いていて、私が齊藤さんに聞きたいな、と思ったのは、窓口というのは、いつでも開いているものなのですか、ということです。それとも、時々パカッと開くのですか。つまり、文科省の窓口は何かのタイミングで開くのか、ずっと開きっぱなしなのか。

齊藤 基本的には常に開いているのだと思います。政策を作るときも、できるだけ幅広い方に意見を聞いて作ろうというのは、どの部署でもやっています。ただ、学術政策だと研究者の方や大学の方など、その分野の方に聞くことが多いです。本当は、社会における研究や夢があるので、こういう感じでご意見を伺えるのであれば、それは貴重だなと思っています。

市民の意見を聞く窓口は、基本的には常に開いています。

その関連としては、文部科学省の中で、「政策のための科学」というプログラムを数年前から始めているのです。このプログラムでPESTIにも研究費の支援をさせていただいています。これは何かといいますと、政策を作るときに、政治家がわっと一晩で決めてしまうとか、あとは審議会という悪い組織があつて、そこに入っている大御所が決めてしまうというようなイメージをお持ちだと思います。そういう面も多少はありますが、そうではなく、もう少し幅広くいろいろな方の意見を伺って政策を作った方がいいですし、その際には、少し客観的なデータや客観的な指標を用いて政策を作っていくことができないかということで、まずは



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

学術政策を科学しよう、科学的に科学政策を作ろう、というプログラムを数年前から始めているのです。その一環で、市民の方といろいろやりとりするという加納さんの取り組み (PESTI) をさせていただいています。なるべく広くご意見を伺ってやっていきたいというのは全体の流れだとは思いますが、どれぐらい意見を受け入れられるのか、状況にもよるし、中身にもよるといことだと思いますが、話も聞かないということではないです。

伊藤 ある意味では、つなぐ役割がとても大事かもしれないですね。窓は開いているとは言っても、一市民として、そこにアプローチは難しい。

つなぐ役割が大切かもしれない。

斉藤 そうですね。おっしゃるとおり、いろいろな方に幅広くご意見を伺いたいとは思っているのですが、では、その方々が全部1人1人ばらばらに来られると、それは難しい。なので、今回のように集まっていた議論の結果出て来たご意見というのが非常に貴重なものになります。

伊藤 そういう意味で、加納さん、何かありますか。

加納 そうですね。基本的に僕の仕事というのは、仲介人というか、つなぐということ。いろいろなコミュニケーションの摩擦がありそうなところに出かけていって、つなぐことをするのが仕事です。こういう仕事があるということ自体も、あまり知られていないので、それも広がっていったらいいかな、と思っています。

水町 確かに300件とか100件がどさっと渡されても、結構困ってしまうところもありますよね。ただ、例えば3つに集約されてしまうと、それはそれで困ってしまう。あまりに集約され過ぎると、自分の意見がどこに入ったのだろうか、「対話」と言われても、私の出した意見は「対話」ではなかったけれど」というようなところがあるかもしれないというのが先ほど登壇者で打合せをした時に出ていた話なのですけれど。

松本 もう既に言ったことを忘れていますが・・・言葉の奥にはいろいろな具体的なアイデアがあるのですけれども、短い言葉でまとめられると、それが埋没してしまうのではないかと懸念があります。田舎へ外国人のお客さまを招こうという私の意見も、国の予算を使わないで、FacebookなどのSNSを使った発信で、コマーシャルできるのではないか、というものです。あと、親日国から、「日本が大好きですごく行きたいのだけれど、お金がかかって行けない」というような人を各国1人ずつぐらい招いて、その人たちに自由に日本を旅してもらって、発

たくさんの意見がまとめられると具体的なアイデアが埋没してしまう？

信してもらおうということが「対話」という言葉の奥にあると思うのですが、それが具体的にどのように政策に反映されるのか、今後の推移を見たいというのが正直な感想です。

加納 届けるときに、どんどん集約していくと、1つ1つの意見が見えなくなっていく。ビジョンだったり、「他者とのつながり・多様性」や「ワクワク・カッコいい」という目指すべき価値観だったりの話になると、先ほど松本さんに言っていただいたような意見がどれと結び付いているのかというのが、なかなか公表資料の方に見えてきません。裏では持っているのですが、どうやって出した意見の行方をトレースしていくかというのが課題の1つなのかなと思いました。

意見がどう集約されたか追えるようにしていきたい。

伊藤 斉藤さんのお立場では、ここから具体的な政策に移していくために、まだ越えなくてはならないハードルのようなものもあるでしょう。それから今出た、抽象的なキャッチフレーズは残るけれど、その裏にある個別具体的な国民の声が果たして参照されるのかという課題もあります。その辺、何かコメントがあれば。

斉藤 夢ビジョンということで、大きい目標を掲げようということで作った資料なので、そんな細かいところまでは書いていません。多分、細かいことを詰めていけばたくさんあるのですけれど、1個1個がいいとか悪いとか、やるとかやらないということ以前に、「オリンピックがあるし、将来のことを語っていきましょうよ」という動きをつくるのが第一の目的です。なので、そういう意味では、それなりのことができたと思いますし、今後もそういう動きは止めないでやっていきたいと思っています。

おっしゃるとおり、今回のものに関しては、いろいろな意見を頂いて、集約して集約して最後3つの言葉になってしまったわけです。その後、今何をやっているかという、「対話」「感動」「成熟」の3つそれぞれがどういう意味なのかをもう1回文章で書き下してみようとか、具体的にどういうイメージになるのかを10個ぐらいに分けて考えてみようとか、いうことをしています。それができたときに、どういう技術なり、どういう制度なりがあって、と、分解していくのもこれからやっていこうと思っています。

まだビジョンを掲げて、これでいきましょうと言って旗を振っている段階なので、個別のものはあまり見えないところがあります。

水町 ありがとうございます。その他、何か。他のテーブルの皆さんからご質問やご意見があつたりしますか。もし、なければ、そろそろ1時間ぐらい経ったので、休憩を10分ぐらい挟もうかなと思います。



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

伊藤 休憩の間にテーブルで少しわいわいして、いい質問を出してください。

水町 では、2時からもう一度スタートしたいと思いますので、それまでコーヒーのおかわりや、机の上のものなど、よかったら、お召し上がりください。

休憩

水町 では、そろそろ2時になりましたので、後半戦を始めていきたいと思います。今10分ぐらいコーヒーブレイクの時間を取っていたのですが、テーブルの中で、お話が盛り上がっていったようにお見受けしました。どんな話をしていたのですか、と聞いてもいいですか。

どんな話をされていましたか。全然関係ない話でしたか。

③意見を出した人へのフィードバックが必要

C 今少し話が出たのは、どうやったら届いたのかということです。今回のように、**実際届け先である文科省の方に来ていただいて、どうやって受け取ったかを言ってもらえることはすごく重要で、それを聞くことで、参加した者にとっては届いたのだなという、自分たちの意見が届いたのだという実感が得られる**ということは素晴らしいことだと思います。

その一方で、今われわれは大阪ですけど、文部科学省が国民の意見を吸い上げる場合に、例えば東京でも当然やらなければいけないですし、東京から地方にも行かないといけなだろうし、そうやって広がっていったときに、来た人に毎回フィードバックしていくわけにはいかない、となりそうです。その辺が難しいですね。いろいろなところで開催するのはいいのだけれど、意見を出した人に、ある程度満足感を得てもらわないと、次に、集まってもらえないことになりますから。そのあたり、**どうやったら意見を吸い上げつつ、意見を出した人に満足してもらえか**ということが難しいなと思いました。

水町 そうですね。全国行脚しますかね(笑)。

④タウンミーティングなどとの違いは？

伊藤 今の聞いて思い出したのですが、**タウンミーティング**など意見を聞く場を展開する取り組みは、例えばエネルギー政策のときなど、過去にも若干あったと思います。それと今回の取り組みとの比較や違いも含めてコメントを頂ければ。

どうやって受け取ったのかを聞いて自分たちの意見が届いた実感を得た。

意見を出した人へのフィードバックが必要。

タウンミーティングとは：行政側が開催する意見交換会で、主に地域住民の生活に関わる事項を話題とする対話型集会です。

斉藤 一番違うと思うのは、「どんなことを議論したか」というのを頂いた後、こちらはこちらでいろいろ考えていることがあったりするので、「もう少し、こういう観点で議論していただくといいのですけれど」とか「もう少しこういう方向でまとめてもらおうと、次の資料に使いやすいのですけれど」というキャッチボールをさせていただいたことかなと思います。確かに、市民の方々からご意見を聞く会というのを分野によってはいろいろやっているところはあるんですが、フィードバックはあまりなかったのかなという気がしますし、そこは新しいなと思いました。役所の側からすると、例えばべたべた付箋で貼って整理していくのは、役人の仕事なのだろうと最初は思っていたのですが、今回このようにいろいろやっていただいて、しかもボランティアとして集まっていただいて、何時間かけて議論するというをやっていただけたことが、すごく新鮮でした。仕事ではなくて、ボランティアでやってもらう。しかも、感覚的に納得できるものもありますし、多くの方でやっていただいたということで、説得力もあります。非常に面白いので、こういうのをいろいろな分野でやるべきだと思っています。

伊藤 先ほどの質問で、全国に展開したときに、斉藤さんが10人ぐらいいないと喜んでもらえないかもしれないというのは？

加納 検討は斉藤さんと一緒にしているのですが、お届け先からのフィードバックで、満足感をどうやって得てもらおうかというのは課題だと思います。毎回斉藤さんに来てもらおうとすると、かなりの数をやっていくのは難しいというのは、よく分かるので。「届く」といったときに、どのようになったら、届いたという実感が得られるのかということと、満足感が得られるのかということ。先ほど松本さんが文科省からお電話がくればとおっしゃっていました。文科省が電話するというのも1つの**アイデア**だと思うのですが、他に良いアイデアがあったりしたら。

松本 シールが頂ければうれしいなというのが(笑)。それは旅行のトランクなどに貼って宣伝することもできますし、もらってうれしいものの1つだと思います。これは参加者だけではなくて、意見を届けて、具体的に動いてくださった人にも差し上げることができるし、海外からのお客さまにも差し上げたりできるようなものがあれば。サルのゆるキャラでも、なかなかかわいいと思います。そういうことがあれば、うれしいですね。

東 お昼のワイドショーなど、世間一般の人が目にするようなところで、今回のようなお話をさせていただいたりはできないものですか。

キャッチボールをしながら作り上げていけたこと。

どのようにフィードバックするのが良いでしょうか？

シールが頂ければうれしい。

ワイドショーなどで有名人が出て話すのは？

齊藤 あまり視聴率が取れないのではないかと思います(笑)。

東 例えばアスリートの方など有名な方が政策の方を通じて、意見を届けてきましたという話をするだけでも。私たち若い世代は、個別にしっかりと意見は持っていないのですが、芸能人が代わりに言ってくれるたら「あの人が言ってくれているから、よし、付いていこう」という人が結構多いと思うのです。はっきりとこういう場で、全員が集まって話をしなくても、若い世代の代表のような芸能人の人が代わりに言ってくれるだけでも、私たちの世代は、私たちの意見が反映されていると感じるのではないかと。20代の私たちからしたら、結構そういうのも。

齊藤 普段は、あまり距離感がないというか、勝手に動いてしまっている感があるということなのですかね。

東 決めてくださって、それをお知らせされて、「またこうなった」と。20代が集まって話していると、そういう感じがありました。

齊藤 政策の作り方も、いろいろ変わってきていると思うのです。例えば重要な報告書を作ると、パブリックコメントを事前に出して、ご意見を伺って、ということをやっていますし、そもそもいろいろな立場の専門家の方に集まっていただく審議会などで議論しているの、全く暗闇の中で勝手に決まって落ちてきたという形でないように努力しているはずなのです。ただ、おっしゃるとおり、ウェブに載っているだけだし、コメントを書いたとしても1件1件に返事が出せるわけでもないの、そういう意味では、確かに勝手に進んでしまっているものもあるかなと思います。

水町 先ほど話題に出たタウンミーティングやパブリックコメントなど、既存の市民の声を国に届ける仕組みが用意されているわけですが、そういうものにお二人は投稿されたことがあったりしますか。

松本 全然ありません。というか、目に触れるところに、そんなにないので。自分から探していけば、そこにたどり着くかもしれませんが、普段、目にすることはありません。役所だけではなくて、日本は全体の発信力がすごく弱い国だと思うのです。個々の人たちの発信力というのは、Facebookなどで付いてきていると思うのですが、国全体としての発信力は弱いのです。そのあたりはもっとマスコミを巻き込んで。ただ、マスコミも偏向している部分があるので、自分たちの放送したい分野は放送するけれど、本当は放送しなければいけないようなニュースや報告をわざと放送しないこともあるので。役所自らが、個人のホームページだけでなくどんどん発信していく。海外に向けて、日本の国民に向けて発



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
齊藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

信することが、今後の日本のビジョンとして必要なのではないかと私は考えます。

伊藤 少し戻ってしまうのですが、先ほどのパブリックコメントのような制度は既にあるということで、実はPESTIも当初は、今松本さんは気が付かないとおっしゃいましたが、パブリックコメントにみんなで話して意見を載せようというようなことは実験してみました。そのときは、たまたま日本のこれからの宇宙開発利用をどう進めるかという5年に1回の宇宙基本計画の案が出ていました。募集期間が3~4週間と短かったので、大慌てでサイエンスカフェをして、意見を寄せて回答も見てみました。ただ、そのときに何人かの方が、一応意見は言うけれど、多分、既に案の方向性は決まってしまうので、ここで何か言っても「確かに承りました」と聞き流されてしまうのではないかとということをおっしゃっていました。それでPESTIとしては、すごく具体的な案ができた段階ではなくて、齊藤さんがおっしゃったように、これからどういう社会をつくっていくとか、10年後、20年後に何を目指していくかという「上流」で意見を出していく方がうまくいくのではないかと話をしていました。その辺、何かコメントがあれば。

齊藤 おっしゃるとおりで、上流の段階で、いろいろやりとりさせていただいた方がいいと思います。確かに報告書案が出た時点で、既に相当いろいろな方の意見も聞いています。夢を語っている分にはいいのですが、そうではない、例えば、規制が強化されるとか、税金が増えるというようなものは、いろいろなことで反対される方もいれば、賛成される方もいる。いろいろな方がいろいろな立場でおっしゃった意見をうまく調整して何とか積み上げるようなものもあるのです。案が出来上がった段階で根本的な意見が来たとしても、なかなかその時点からやり直せないというのは確かにあると思います。書きぶりや表現を少し直す程度のものであればいいのですが、骨格そのものは、その時点では変えにくい面があると思います。骨格を作るときに、今回のように意見を言うというのが一番いいのだと思います。

骨格を作るときには上流でやりとりしながら作るのがいい

伊藤 その辺について、今日参加されている皆さんも何か意見があれば。後でもいいのですが、伺えたらと思います。

水町 せっかくなので、4番テーブルも結構盛り上がっていたと思うのですが。

⑤ 厳しいコメントへの対応は?

D 今おっしゃったように、フィードバックの仕方について議論されていたというの理解できる、というような話がありました。

もう1つは、夢ビジョンで、意義を話そうという趣旨だったと思うのですが、原発なども科学の1つの側面です。夢について語る前にこういうことをやってほしいのだという厳しいコメントがあったときに、それをきちんと聞いてもらえるのでしょうか。「それは陳情になりますので、それは別の話に。」となるのか、ということを知りたい、という話をしてもよろしいでしょうか。

伊藤 素晴らしいご意見ありがとうございました。

水町 そうですね。窓口が別だったら結構困ってしまいますね。

伊藤 斉藤さんがなかなかマイクを取ろうとしない(笑)。

斉藤 どうお答えしていいかわからないのですが、そうですね、意見を出していただく方からすれば、別にどこの省庁であるか、どこの課は関係なく、こうあるべきだ、こうすべきだというのがいろいろ出てくるのだと思うので、おっしゃるとおりだと思います。本当は理想を言えば、**プラスの意見もマイナスの意見も、どんな意見も常にアピールする体制**があって、それを基に議論するのは、究極的には理想だと思います。ただ、全部の議論に全部の方に入っていただくわけにいかない、意見のある方の意見を集約して、最終的には届くような仕組みを作るかという話なのだと思います。その作り方は、まさに加納さんが研究されているのだと思います。確かに、いろいろな問題がどんどん複雑になってきているので、役所の中のある課やある事業だけで考えるとなかなか前に進まないような話が多いのです。そうすると、もちろん役所の中でも組織を越えなければいけないし、違う省庁と話をしなければいけないし、そもそも霞ヶ関だけで議論していても駄目で、民間の方などいろいろ入っていただかないと基本的にはできない問題。だからこそ、複雑で今起こってしまっている感じになっていると思います。いろいろな方が集まって議論しないと解決できない話ばかりだと思うのです。ただ、残念ながら、そういう問題をうまく解決していく良い仕組みがまだまだできていないとか、みんなが模索しているような段階だという感じがします。

東 ちょっとうまく言えないのですが、実際私たちがワークショップを3回している時にも、「夢ビジョンを語ってください」だったのですが、やはり**市民なので、「ここはあかん、あかん」というようなマイナス**

理想はプラスもマイナスも常に受け取り議論すること。

市民からはマイナスの意見が出がち。でもポジティブに変換されて反映されたように感じる。

ネガティブな意見をひっくり返して届けるとうまく反映されていくのでは?



の意見が結構出てくる。「もっとこうしたらいいのに」というような意見が出てきました。でも、そのようなマイナスの意見を裏返して、夢ビジョンにつなげようという感じになって。このようにすごいポジティブな感じにしてもらったという点では、参加した身としては、マイナスの意見も一応反映されていた会だったのかなというように感じました。原発の話も出てきましたし。

伊藤 地方が疲弊しているとか、いろいろな。

東 はい。そういうマイナスのところがたくさん出てきて。「もっと地方を活性化させる」というように、裏返すことができたのがすごく良かったかなと思いました。

加納 僕もワークショップの中で、マイナスの意見を裏返していつているのが、すごくいい場だなと思って見ていました。というのも、パブリックコメントもマイナスの意見が出るのですが、消費者庁かどこかが勧告のようなものを出しています。パブリックコメントを国民からの苦情だと捉えずに、国民からの贈り物だと捉えなさいというような勧告が、パブリックコメントを受け取る側の行政に対して出ていて、まさにそれは重要なところ。苦情だと思ってしまうと、どうしても「嫌な意見だな。見たくもないな。」と思ってしまうのですが、先ほど東さんがおっしゃったように、ひっくり返してもんでいくと、それがポジティブになる。われわれはパブリックコメントをPCと略するのですが、それをポジティブコメント (Positive Comment) と呼ぼうと、**ポジティブコメントにして届けたら、マイナスの意見も、うまく反映されていくのではないかと考えています。**今回の取組は、まさにそういうことが行われていた、ということを確認できました。

伊藤 そこは加納さんなど何人かが身骨を砕いて、ポジティブに色を変えて届けたと。

加納 そうですね。仲介人としては、読まれる方、届けられる側の人が苦情だと思わないようにする。だけど本当は、役人側のマインドセットとして、これを苦情だと受け取らないというような気持ちを持てるようになってくれば、パブリックコメントというのは宝物に見えたり、贈り物に見えたりするのだと思うのですが。現状はそうはなっていないので、そういう勧告が出ているのだと思っています。

斉藤 原発の問題や震災の問題がありますし、2020年の先といったときに、すごく少子高齢化が進んでいるとか、エネルギー制約がうんぬん

とか。普通に社会的課題を並べて議論を始めると、どんどん暗い話に
かなっていかないような感じがあるのだと思うのです。そういう閉塞感
を感じています。ですから、これまで暗い話については、もちろん手を
打つための対策をそれぞれの担当部署がきちんとやっているのです、それ
はそれできちんとやってもらいつつ、でも目先の暗いことばかり言っ
ていても仕方ないので、せつかくオリンピックが来るだから、日本全体を
明るく盛り上げて、将来のことを語りましょうよ、というので始めたので
す。ですから、サブタイトルは、「徹底的にみんなで夢を語ろう」となっ
ています。役人もそうですが、「今日も明日も国会があるので」とか、「夏
に予算要求しなければいけないから資料を考えなければ」など、せいぜ
い1年、2年先ぐらいしか見ていない面もあったりするのだと思います。
それだと将来が明るくならないのではないかと思っ
ていて。ですから、せつかくの機会だから将来を見ましようということ
です。ご議論いた
いて、出していただいた案は、もちろん非常に貴重なのですが、そのこ
と以上に、夢を持って将来を語る場ができたことが大事なのかなと思っ
ています。そういうのは引き続きオリンピックに向けて、その先もやっ
ていかなければいけないのかなという気がします。

水町 ありがとうございます。用意してきたディスカッション2の方
にも軽く触れてみていいですか。

ディスカッション2 「届いた=夢ビジョン2020文書に反映された」ときに どう思いましたか

水町 ちなみに、今回、私たちがワークショップをして出てきた意見の
一部が「夢ビジョン2020」の文書に反映されたとなったわけですが、
実際反映されたときに、意見を出した側は、どう思ったのかということと、
反映させた側もそうかもしれないですけど、その間を仲介した側も、
「届いた」ときに、どう思いましたかということ、この先少しだけ聞い
ていこうかなと思います。まずは、出した側。

松本 反映された。でも、それが実際にはどのようになるかというのは、
今のところまだ見えない。こういう意見が、このように反映されたとい
う報告があるわけではないと思うので、私たちの意見はこのような形に
変わってしまっ
て、このような実現方法で実施されたのか。というよう
な感想を持つのではないかと想像しました。2020年の話なので、まだ
分からないというのが正直なところ。

水町 そこまでの実感はないかな、という。



松本 はい。

伊藤 お題としては、「文書に反映された」となっているけれど、松本
さんとしては、文書では満足できないという立場。

松本 そうです。

⑥自分の意見が届くと感じるのが大切

東 若い世代も委員会や研究者の方の意見がいろいろあって政策が
決まっているのだと、実感するのですが、**こういう形でみんなが集
まって話したことが、きちんと届くのだということは知らなかった。今回
それを知って、届くのだということが分かったということでは、印象が
随分変わりました。そういう届き方がある、(対話型)パブリックコメン
トという場があって、一般市民の話が反映されるものだということを知
ることができたのは、すごいなというように思いました。まず、届くのだ
ということを知らないので、動こうとは思わないし、動いたらいいのだ
ということが、私は今回体験できたので、それは良かったと思います。**

自分の意見がきちんと届くと知っ
て印象が変わった。

加納 仲介人としても、先ほど伊藤さんがおっしゃったように、宇宙基
本計画のパブリックコメントの経験では、基本的には受け取られたけれ
ど、「承りました」という文書が返ってくるだけだったので、意見を届け
た後どうなるのかというのは、半信半疑なところがありました。けれど、
上流の方の将来ビジョンだったら、骨格もあまり出来上がっていないし、
ひょっとしたらいくつか反映されるところがあるのかなという思いで届
けました。実際に夢ビジョンの中に反映された箇所があるので、そうい
う意味では、参加していただいた方々にもフィードバックできるな、お
知らせできるなと。3回目のワークショップの時に、届けた後に、みんな
で集まる場を用意したいと約束していたので、こういう場ができたとい
うのは良かったなと思っています。

一方で、先ほど3番のテーブルから出ていた、今回は大阪だけで開催
した、というような話もあります。また、別の見方をすると、**PESTIとい
うプロジェクトの日本語名は「関心層別関与フレーム設計」になってい
るのですが、関心がある人も、潜在的に関心がある人も、あまり関心が
ない人も、みんな意見を持っていて、そういう意見が等しく届けられる
ようになったらいいなと考えています。**そういう意味では、今回公募で
集まってくださった方々というのは、実際かなり関心が高い方々なのだ
ろうな、というように思っています。届けた意見というのは、ある程度関

科学への関心が高い層だけでな
く、幅広い人の意見を等しく届け
たい。



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

心が高い人たちから出てきた意見であるというバイアスがかかっていることも認識した上で進めていかなければいけない。

一方で、東さんがおっしゃったように、**届くのだということが分からないと一歩踏み出せない人もたくさんいるというのはよく分かるので、ぐるぐる回るのだと。こうやって先行事例を作って初めて、次に潜在的に関心を持っていた人たちが参加するようになると思うので、1回で終わらせてはいけないという議論もあると思います。**

届くとわからないと一歩踏み出すのは難しい。届くプロセスをぐるぐる回していくことが大事。

伊藤 関心がない人の意見も集めるために、加納さんは、**米原市**のカーオケ大会に訪ねて行って意見を聞いて回る、という涙ぐましい努力をされています(笑)。

加納 いろいろやっています。

伊藤 それは米原市の健康増進?

加納 健康づくりのビジョンをつくる。

伊藤 国の政治だけではなくて、自治体レベルでも、こういうことがあればいいなと思っているので、皆さんの自治体でも何かお役に立てることがあれば、お声掛けください。

⑦今後の予定は?

水町 そうやってぐるぐる回そうとしたときに、「夢ビジョン2020」ではない何か政策なりビジョンなり、これから先、いろいろな人の意見を聞いていきたいと思っているプロジェクトがあったりするのですか。

斉藤 今回は、かなり新しい挑戦だったので、具体的なこういうやり方で何か、というのは私も知らないのです。ただ、5年ごとの基本計画はいろいろな分野で作られていて、それを5年に1回作る時というのは、結構前から、そもそも現状はどう分析するか、どちらの方向へ向かうかを議論するのです。議論して、いろいろな人に意見を聞く中で、ある程度作られたような段階になっていく。そういうものにうまく入って行って、まさにそういう情報を作るというのは、あるのではないかと考えています。

先ほど、関心層別という話がありました。確かにいろいろなご意見を頂くのですが、どういう立場の、どういう意見なのかによって全然違うのです。物によっては、組織票的に、全く同じ文言の意見がどぼどぼと出るときもあれば、非常にとんがった方向に行ってしまう、とても政

「健康づくり・福祉の将来像」に関する対話型パブリックコメントを滋賀県米原市で実施。おかげさまで終了しました。
http://www.pesti.jp/home/event/taiwapc_maibara

策では扱えないものもある。いろいろあるので、どういうプロセスで意見をまとめて入れるのか、全体のバランスをどう見るのか、という話があって、難しいなと思います。

今回夢ビジョンに関していろいろご議論いただいて、少しは言葉が入ったと思うのですが、ここから先だと思うのです。この資料に入ったからといって、何もなかったら何もないわけですし・・・。

伊藤 今、松本さんが「そうですね」って(笑)。

斉藤 役所のホームページに出ている文章でも、書いてあるだけで、何も、その後につながらないものも、もちろんあると思うので、そうなってしまうと寂しいなと思っています。特に、**これはビジョンを掲げているだけなので、実際この先、どういう方向なり、予算なりで動いていくのかというのは、まだまだこれからです。なので、動きを止めないように、みんなで盛り上げてきたいと思っています。**

言葉は入ったけれど、どういう方向へ進んでいくのかはこれから。

伊藤 まとめ話で宣伝する予定だったのですが、繰り上げて。お手元にあると思うのですが、**神戸でスーパーコンピュータ京の次のスパコンがまた世界一を目指すそうなのですが、それを使ってどんなことをやったらいいかというパブリックコメントが今募集されています。**これは担当者が、斉藤さんのような人ではないだろうから、伝わるかどうかは分からないのですが、とにかくパブリックコメントをみんなで話し合っ

2014年5月2日「サイエンスカフェ神戸/対話型パブコメ「次のスパコン“ポスト『京』”の『使い方』を考える」、おかげさまで終了しました。

送ろうというのを急遽開催することにしました。ポートアイランドの京のすぐ隣の神戸大学の建物でやりますので、ご関心があれば、ぜひお越しください。
あと、夏に、日本の科学技術をこれから5年間どう進めるかというような、「第5次科学技術基本計画」の策定の準備が始まるので、それを目指してPESTIとしても、同じような取り組みしていこうということを考えようとしています。加納さんから何か一言ありますか。

加納 計画を作り始める段階でやっていくことが重要だというのは、斉藤さんもおっしゃっていたし、皆さんと議論して分かってきました。その1つとして、「第5次科学技術基本計画」という、今後2016年度からの5年間を決める大事な基本計画がありまして、それにわれわれとしても集まって意見を言っていくことができないか、と思っています。

こういうのをやる時に1つ大事なことは、届け先をきちんと持つておくということだと思っているので、その届け先も今考え始めているところです。届け先をご用意して、皆さん方に伺いたいと思っていますので、その際には集まっていただければと思います。関心がある人だけでなく、この1時間半ぐらいお話を聞いてくださって、「少し関心を持って

きた。だったら行ってみよう」と思ってくれる人を、われわれとしては巻き込んでいきたいと思っています。ご関心のある方から、関心を持ちそうな人から関心のない人まで誰でもウエルカムですので、ぜひお越しいただきたいと思います。

伊藤 今、スタッフが声を掛けてくれたのですが、金曜日のイベントのチラシが少し余っているようです。受付にありますので、お帰りの際にお知り合いに紹介して下さる方がいたら、拾って行ってください。

水町 今週の金曜日ですか。

伊藤 今週の金曜日、5月2日です。

斉藤 第5次科学技術基本計画について、少しご紹介させていただきます。5年間の計画で、今回は第5次ということで、そろそろ検討が始まるような感じです。それが2020年までの5年間。なので、まさに夢ビジョンでご議論いただいたこととスケジュールがぴったり合っていて、その5年間で、国の科学技術政策の中でどういうことをやるべきか、ということを書き込む一番重要な文書になります。ですから、いろいろご議論いただいたことが、「夢ビジョン」には抽象化されて一部しか載っていないのですが、その中で科学技術に関する具体的なことは、その計画に書き込むなり、具体的な政策や事業としてやられていくような形があるかもしれないということで、引き続きやっていきたいと思っています。

ただ、オリンピックに向けて、どんなことができるのかというのは、ありとあらゆる分野に関連してくるので、基本計画にもオリンピックのことを書くことを考えたいと思っていますし、その中には今回書いてあることが入っていればいいなと。

伊藤 今日は、学生や大学院生や若い方も来ているので、ぜひ何か。向かいで、目が合ってしまうのですけれども、いかがですか、そちらの女性。

⑧意見の「熱さ」も政府まで届けたい

E ありがとうございます。紹介してもらって、今回寄せてもらいました。最初、シンポジウムのタイトルの2行目の科学技術イノベーション政策の具体的話をされるのかなと思っていたのですが、そうではなくてレジュメ段階ができたということは伝わってきました。それで思ったのですが、多分、**市民のワークショップに出られた方は、すごく熱い思いを持っておられたと思うのですが、それを仲介して、届けたら、強く思っていたことが、すごくあっさりして届けられて**



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

しまう感じが、文章を見ていたらするのです。仲介して伝えるとなると、分かりやすいように伝えないといけないので、そのように文章化されてしまうのは仕方ないと思うのですが、特に市民の側からの熱い思いを届けてほしいというのは、他の件でもどうしたらいいのかなと考えました。

市民の側からの熱い思いを届けてほしい。

伊藤 とても重要な質問、ありがとうございます。その文章をまとめるのに活躍された感想を。

加納 そうですね。確かに、熱さのようなものが減衰していて、やや冷たくなっている、というのは感じました。どうしても集約という作業自体に伴って、そういうことが起こる一方で、熱さのようなものをどうやって残せるのか。残すための仕組みのようなものを作れないか、というのを、われわれプロジェクト内でいろいろ議論をし始めているのですが、なかなか難しいと思っています。すごく具体的なアイデアとして出てきているのは、Facebookと連動させて、みんなで「いいね!」となった意見だったら、かなり幅広い人がいいと思っている意見になっていると思うので、そういった形で熱さを見せることができるのではないかと。個人の熱い思いも紙の上に落とさないと文科省に届けられないので、アイデアがあればお二人に伺いたいのですけれども。

松本 紙媒体にしても、ちょっとマイナスの意見や厳しい意見だけを箇条書きにしておくこともできると思うのです。**きれいにまとめるのではなく、意見を言われた方の話し言葉そのまま箇条書きにしておくことも、その思いが相手に伝わるのではないかと思います。**それをきれいにまとめようとするから、そこに無理があるのであって、3回やって、いろいろな意見が出ましたが、それを全部入れて「別紙参照」にしてあげれば解決できるのではないかと私は思いました。

意見をそのまま箇条書きにし言葉遣いを残す。

伊藤 今のお話で思い出したのですが、斉藤さんとは別の文科省の人が、こういうビジョンを実際の政策にしていくとき、人を説得していくときに、物語がすごく大事だと言っている人がいました。ひょっとしたら物語をつけることで、抽象的ではない何か説得力が生まれるみたいなことが起きるかもしれないのですが。

斉藤 ありがとうございます。これを見ていただいて、熱さがないということではないかと思うのですが(笑)。確かにそうかもしれないのですが、各人から出ている意見の中では「夢を語ろう」など、たくさん書いてあるので、かなり熱いのではないかと考えています。だから、大臣が「役人の作った資料ではないね」と言ってくださったのだと思います。もちろん、ご議論いただいた1個1個の熱さは見えていないかもし

れないのですけれど。でも、みんなの「明るいことを考えようよ」という熱さは多分伝わってきていて、それがあつた程度はこの資料の中にもあつて、それなりに広まりつつあるという気はしています。もう少し熱くできるように考えたいと思います。

伊藤 では、この資料のほのかな温かさを感じてください。

東 仲介人が入ると熱が冷めていくというお話もあつたのですが、でも、私たちの思いは熱いが具体的な案はなかなか出てこない。また、政策に移るために必要な文言はなかなかワークショップで出せない。そういうときにPESTIさんなど専門家の方がいると、「では、そういう思いだつたら、こういうことができるかも」というヒントが出てくる。すると、熱い思いが具体的になって、より熱くなって、自分の思いが具現化されます。ですから、仲介人、まとめ役が要ると思ったのです。単に私が言うよりは、間に入る人がいた方が熱い思いがきちんと伝わる感があるというように私は感じています。

仲介人がいた方が自分の思いが具現化されてきちんと伝わる気がする。

松本 少し話は違うと思うのですが、いろいろな業界で、お客からクレームが来たときに、それにどのように対応するかによって、その企業のファンをつくるか、敵対者をつくるのかが決まってくるのです。上手に対応すれば、ファンができて、その人は、「あそこはいいよ」という意見を友達に広めてくれるのです。だからマイナス意見や厳しい意見も、その裏には、すごく良いアイデアがあつたりするので、その意見を言葉を変えてきれいにしないで、そのまま届けてもいいのではないかと思います。先ほど文科省の中では熱いとおっしゃりましたが、そこには一般市民との間のギャップがすごくあると思います。そのあたりが少し違うかなと思いました。

伊藤 ある意味では、こういった活動も1つのコミュニケーションだと思うのですが、コミュニケーションするときには、情報発信する側と受け手側のことを考えないと、なかなかコミュニケーションがうまくいかないです。逆の見方をすると、文科省の人に、物の言い方によっては「また来たか」と聞き流されてしまいがちだったものを、文科省の人でも耳を傾けてくれるような物の言い方を加納さんが一生懸命苦労して作っているのかなと。そういうことの繰り返しの中で、お互いの間の関係性が深まっていくと、良いコミュニケーションができるのかなというように最近思っています。

互いの理解を深めることで、より良いコミュニケーションができるのでは。

司会者が弁護してもいけません。

水町 他にありますか。



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

伊藤 だんだん時間が残り少なくなってきているので、ぜひ何か言っておきたいことがあれば。

F 今日は、初めて参加させてもらったのですが、面白い会だなと思いました。一番思うのは、文科省が全部斉藤さんのような人ではないということですね。すごく良い人と巡り合ったと思うのです。先ほどの伝えるという話、届いているという話があつたと思うのですが、要は、相手に受け取る気持ちがあるかどうか。その人に巡り合うか、これは運でしかないと思うのです。隣の人だったら門前払いをくうかもしれない。そういう点からすると、聞く耳を持った素晴らしい方と巡り合って、コミュニケーションができたのではないかと私は思いました。

巡り合わせも大切。

伊藤 ありがとうございます。

加納 パブリックコメントを研究して書かれた本があるのですが、そこには、パブリックコメントの反映率が高かったり低かったりするという研究が紹介されています。それは極めて属人的であるそうです。受け取る人の局長課長級クラスの人がどれくらい受け取る気があるかということに随分左右されているのではないかというのは、すごく実感できるコメントです。ありがとうございます。

伊藤 後々まで残る映像に、文科省の方で斉藤さんはいい人だというのは、斉藤さんも複雑な気持ちだと思います(笑)。

斉藤 難しいですね。確におっしゃるとおり、もちろん人によるというのも、そうですし、どういう案件なのか、委員会なのかなど、さまざまな条件によって違うと思います。今回は非常にうまくいった例だと私自身も思っています。ただ、国の役人だったらもう少し長期的に物を考えないといけないのでしようけれども、日々の業務に追われてあまりにも忙し過ぎる状況なので。今回は、ビジョンを語るのが非常にうまくいったと思いますし、さらに非常にビジュアルになっているので、こういう貴重な意見を頂きながら広がるというのもあると思います。

私はよく、局所最適と全体最適という言葉結構使っているのですが、あまりにも局所的に最適化されてしまっていて、全体が最適化されていないというのは常に思っています。そこは逆に意識改革をしっかりやらなければいけないと日々感じていまして、内部改革のようなことを少しずつやり始めていますので、1人でも多くの方がいろいろな意見を聞いて、政策を作ろう、というようにどんどん変わっていくのであればいいな、と私も中から頑張っているつもりです。

水町 その他、どなたかいらっしゃいますか。何やら譲り合っている姿が。

G ありがとうございます。こういう場に初めて出させていただいて、こういう場があるということ自体がすごく価値があるというように感じていました。僕が思っていたのは、このビジョンと政策の距離感というところなのですが、これからされるということで大いに期待したいところなのですが、日ごろ政策を作られる際に、何を参照されるのかということが気になりました。こういうビジョンを作ったときに、日ごろ参照されるものに対抗し得るのだろうかということが少し気になっていました。

斉藤 見ようによっていろいろあると思うのですが、今回ここまで皆さんと一緒にできたのは、新しいことだからなのですね。2020年には56年ぶりにオリンピックをやって、先進国になって、成熟した社会で2回目のオリンピックを始めているでしょうし。どういうオリンピックにできるのかというのは、まだ誰も分からないし、過去検討された計画があるわけでもないし、新しいものを作る段階だからできたのかなと思います。

普通の場合は、過去に作られた基本計画があり、それにのっかって予算が付いていて、施設もあって、人も雇われているわけです。現状があって、それをどう変えていくかということから始めて、そんなに自由気ままにできるわけではないというのは、おっしゃるとおりだと思います。これはまだ新しいので自由度がある。おっしゃるとおり、全く新しいので、取りあえず書いたので、まだ各論がないというのに近い状態なので、それは今後汗をかいて、きちんと作っていかなければいけないと思います。それにはまたいろいろご協力いただいて、いいものにできたらいいなと思います。

水町 もう一方か二方あれば、お話を伺おうと思いますが、もしなければ。

伊藤 後ろの方で手を挙げている方、いいですか。

5番テーブルですか。5番テーブルは、映りたくない方だそうです。では、もし何かあれば手を挙げてくださって。では、映らないように。

H 本日は、ありがとうございます。感想になってしまうのですが、夢を伝えるとき、**熱い思いというのも非常に重要なことだと思うのですが、パブリックコメントで得られた意見の本質をいかに伝えるか、そこが重要ではないか**と思います。得られる意見というのは現象論のようなものが多いと思うので、そこを押さえることに意味があるので。本質を突いて伝える必要があるのではないかと思います。もちろん、熱い思いというのも併せて伝えないといけないと思います。感想です。

意見の本質をいかに伝えるかも重要。



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
斉藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

水町 ありがとうございます。

H 1つだけ聞きたいことがあるのだけれども、パブリックコメントを出したことのある方がどれくらいいらっしゃいますか。

伊藤 パブリックコメントを出したことあるか、ということですか。

水町 この会場でということですかね。

挙手

H ありがとうございます。

水町 満足ですか？

加納 その意図を。

水町 そうですね。ご感想は？ 案外多かったのですか、それとも少なかったですか。

H 僕は、趣味が統計なので数字が頼りなのです(笑)。大体これぐらいの人数で、集まっておられる方が、この内容を話しているときに、どれぐらいの割合でパブリックコメントを出したことがあるのか。そのときに、ここで聞いていて、例えば出したものに対するレスポンスがはつきり出てこないですね。また、自分が出したものが歪曲された形で伝わることもあるかもしれない。例えば大阪府で言うと、たばこ条例案を計画しているときに、たくさんのパブリックコメントを集めたのですが、結果、市議や府議が集まって反映されなかった。そのまま条例自体は作られたところもあるので、集めたものがどうなったか、というのが結構あたりするのです。それが相手のコンペティションになってしまうと、今度はこれが著作権が出てくるので、ややこしくなってしまう。意見を出された側としては、さまざまな思いをされた方がいると思うので、府民なら何と答えているだろうなと思いながら今日は統計を取りました。

伊藤 今日は、伊丹市でサイエンスカフェを継続的に開いている方が5人ぐらい来てくださっていますが、何か一言いただけたら。3番のテーブルのIさん。

I 兵庫県の伊丹市から参りました。サイエンスカフェ伊丹を主催させ

ていただいております。

全国行脚をされるときには、ぜひ第1回は、伊丹でやってください。場所のご提供はできますので、ぜひ、していただければ。楽しみに、お待ちしております。

先ほど手を挙げたのですが、パブコメを書いて出すのはハードルがとて高いのです。国、県、市。「国なんか、とんでもない、私たちには関係ないだろう。出していけないものだ。」という思いがあって、市に出すのでも、すごいエネルギーがかかる。なおかつ、何回か出して、もう二度と出すまいと思った。何でそう思っていたのかなと思っていて、今日すっきりしたのは、出して届いた感が全くなかったのかなと。届いた感がある、「届きましたよ」と感じることは、すごく大事なのだなというのを今日は気づきました。

届いたと感じられることは大切。

また、これまでフィードバックがなかったという話をされたのは、出す側にとっても、フィードバックをかけていただいて、より良い形でお届けできるというのは、こちらも願うことなので、ぜひ伊丹に来ていただければ、フィードバック付きで案内していただけるとありがたいと思います。

1人で書くよりもディスカッションしながらすることで、考えも成長して、まとまったものができると思うので、ぜひそういう機会を体験したいと思っています。ありがとうございました。

おわりに

伊藤 ありがとうございます。

それでは、残念ながら、そろそろ時間が来てしましまして、本当は司会は1人でよかったのですが、事前の打ち合わせで、最後にこういうことも言ってほしい、ああいうことも言ってほしいと言っているうちに、「おまえも出てこい」ということになりまして、司会に入りました。司会にはテーブルがなく、書類を持つのが大変なので、立ち上がらせていただきました。今日は、皆さん、本来であれば、ゴールデンウィークのもっと楽しいいろいろなことがあったところに来ていただいて、ありがとうございました。

今日お話があったように、非常に幸いなことに、文部科学省の中にも政策の作り方を今までとは違う、もっと多くの人の意見に耳を傾けて作っていきような形にしたいという熱い思いを持った齊藤さんという方がいらっしゃる。あとは、私たちも特に原発の事故を大きなきっかけにして、将来の国のあり方や科学技術がどう使われていくかについて、いろいろ言うことを言っていきたい、いくべきであるという思いがあります。ともすると、日本の国民は、今までは政策を作るところは政府や官僚に任せておいて、後で起きてきたことに文句を言うだけだったような



「仕掛けた人」
加納 圭



「受け取った人」
齊藤 卓也



「参加した人」
松本 洋美



「参加した人」
東 若菜



「司会」
水町 衣里



「司会」
伊藤 真之

ところがあるのですが、こういう形がもっと広がって、みんなが構想する段階から参加していけるような形になったら、いい国ができるのではないかと非常に楽観的ですが、思っています。

そういう中で、夢ビジョンの取り組みを重ねて、今日報告させていただきました。松本さんもそちらの方もおっしゃってくださったように、ビジョンというのは確かにある、ただ、政策とビジョンの間には、もう少し距離感がある、ということで、先ほど齊藤さんからは、そこを埋めていくために、恐らくこの数カ月ではないかと思いますが、これから汗をかかれると。われわれが協力ができればしていただきたいという、ありがたいことがありますので、皆さん方もそのところに参画していただければと思います。

1月か2月に、プロジェクトのあるメンバーが、こういった政治への国民の参加についてイギリスへ調査に行ったのですが、そのときにイギリスのある研究者から「日本で、あれだけの原発の事故があって、国民の参画が進まないようだったら・・・」というようなことを言われたということで、ぜひこういうことが進んでいくことを期待しています。

マーティン・ルーサー・キングの「I Have a Dream」という有名な演説があります。私も割と楽観主義者で、今は大阪での小さな取り組みですが、これがこれから日本に広がっていつか社会が変わっていくことを夢見てこれから取り組んでいきたいと思っています。

それでは最後に、今日は、皆さん、ご参加いただき、本当にありがとうございました (拍手)。

注意：読みやすさのため、発言の記録には軽微な修正を加えている部分があります。

PESTI(= ペスティ)とは?

PESTI(「科学技術イノベーション(STI)に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計」(Framework for Broad Public Engagement in Science, Technology and Innovation Policy))は、京都大学、大阪大学、神戸大学、滋賀大学、鳥取大学、帝塚山大学の6大学に所属する研究者らが2012年に始めたプロジェクトです。

科学技術イノベーションに対する国民のニーズを科学技術イノベーション政策形成過程に反映させるための方法論や仕組みを開発し、それを社会に実装することを通じて、より民主的かつ根拠に基づいた科学技術イノベーション政策の実現を目指しています。

PESTIは、独立行政法人科学技術機構(JST)社会技術研究開発センター(RISTEX)が実施する「戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発):科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」の一つとして、また文部科学省が進める「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』推進事業」(SciREX=サイレックス)の一部としても位置付けられています。



対話型パブリックコメントの足跡をたどる 01

2014年12月 発行

発行編集: 神谷麻梨(京都大学) 多々良直治(カイエ株式会社)

ディレクション: 多々良直治(カイエ株式会社)

デザイン: 宮本賢司(スピーク)

イラスト: サタケシュンスケ

印刷: 国際印刷出版研究所

発行: PESTI

連絡先: 〒606-8501 京都市左京区吉田牛ノ宮町

京都大学 物質・細胞統合システム拠点 (iCeMS=アイセムス)

科学コミュニケーショングループ

特任准教授 加納 圭

TEL. 075-753-9784

FAX. 075-753-9785

E-mail. pesti@icems.kyoto-u.ac.jp

URL. <http://www.pesti.jp/>

PESTIは、独立行政法人科学技術振興機構(JST)社会技術研究開発センター(RISTEX)が実施する「戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発):科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」の支援を受けて活動しています。